

桃山学院大学

社会学論集

第58巻 第1号

<論 文>

「よむ」ことを支えるつながりの意義

——近代短歌における「歌の集団」再考——

..... 松 澤 俊 二 (1)

<書 評>

反エリート主義的<メディア人間>から読み取るメディア研究の「二流性」

—『前田久吉, 産経新聞と東京タワーを作った大阪人』を読む

..... 彭 永 成 (25)

博士論文の要旨および博士論文審査結果の要旨 (中川久恵)

..... (41)

2024年9月

桃山学院大学総合研究所

「よむ」ことを支えるつながりの意義

— 近代短歌における「歌の集団」再考 —

松澤俊二

キーワード：共同性、限界芸術、百人一首、投書、趣味縁

はじめに

歌人の窪田空穂は「歌の集団を讃ふ」（『日本短歌』7巻1号、1938・1, 101頁）のなかで、〈歌の上の格好な仲間、恰好な指導者といふものは、歌からいへばまさしく母胎だ〉と記している。表現には熱意が必要であり、その熱意は〈異常なる天分を持つた人であれば格別、普通の人間では、刺激がなくては湧いて来るものではない。それを与えてくれるのが〈格好な仲間と恰好な指導者〉すなわち〈歌の集団〉であるという¹⁾。

空穂の指摘は、近代短歌研究が今後展開すべき一方向を示唆するものと考えられる。というのも、近代短歌は長く〈個人の時代の短歌〉、〈自我の詩〉の問題として概括されてきたからだ²⁾。そして、その研究領域では今なお

1) 佐藤佐太郎『短歌を作るころ』(1985, 角川書店, 164頁)も〈個性を探究し、個性を成長せしめるためには、結社とか流派とかいうものが大きな役割を果たす〉と記す。また佐太郎の師である齋藤茂吉も「定跡」(『作歌実語鈔』1947, 要書房, 3頁)のなかで歌会で作歌し、人と議論することなどが〈作歌活動の「潜勢力」をつくる〉と論じる。

2) 佐佐木幸綱「近代短歌」(『現代短歌大事典』2000, 三省堂, 192頁)は、その特色を〈「個人の時代の短歌」「自我尊重の時代の短歌」〉とし、また三枝昂之「近

〈研究主体の立ち位置が、相変わらず伝統的な作家論、及び作家と紐帯を持った作品論に立っているものが多い〉との指摘がある³⁾。集団が歌の表現や「よむ」（短歌を詠み、また読む）行為にどのような影響を及ぼすかという問題については、わずかな成果を除いて⁴⁾、ほとんど手つかずのままに今日まで来たといつて良いだろう⁵⁾。

本稿は空穂の指摘に導かれながら、近代短歌における〈歌の集団〉の意義を再考する。どのような共同の力が、人々の「よむ」行為を生じさせ、持続させ、作品を創造するための動力となったかを論じたい。ただし、本稿では「集団」という言葉に代えて「つながり」という語を使用する。

「集団」の語義を確認すると、それを成り立たせる要件は〈共通の思考わく組みや規範および共属感情があり、一定の相互作用の継続を可能ならしむる組織性が見られる〉とある⁶⁾。おそらく空穂も短歌結社を前提に先の議論を展開している。確かにそれならば共通の思考枠組みや組織性を持つ「集団」の定義と合致しよう。だが、短歌に関わる人々は、結社に属して一定の文学理念を奉じ、特定の人を師と仰ぐ、「社友」や「会員」といった明確な

代短歌と現代短歌」（『岩波現代短歌辞典』1999、岩波書店、211頁）は〈近代短歌はさまざまに特徴付けられるが、個々の見解の違いを超えた共通のモチーフは「自我の詩」である〉と記す。

- 3) 小林幸夫「短歌研究の現状と課題」（『日本近代文学』100集、2019・5、100頁）
- 4) ジャーナリズムでは結社の功罪などがしばしば取り沙汰されるが、集団と短歌表現との関わりを学術的に論じた成果は少ない。たとえば、小林幸夫「石川啄木と「砂」の詩想」（『上智大学国文学科紀要』19号、2002・3）、柳原恵津子「啄木調「かな」出現の契機——古典文学・与謝野晶子・吉井勇との関係という側面から」（『国際啄木学会研究年報』21号、2018・3）、河野有時「歌のひろがるとき——「スバつた歌」の行方」（『国際啄木学会東京支部会報』23号、2019・3）、松澤俊二「題詠による〈自己表現〉の試行——明治四〇年代、根岸派の歌会に注目して」（『文学・語学』191、2008・7）、同「『和歌革新』を進める力——「女子文壇」誌による「新派」和歌啓蒙と読者たち」（『国語と国文学』99巻8号、2022・8）など。
- 5) 歌人からも近代短歌の研究に〈大局的な視野〉を求める声が挙がる。たとえば佐木幸綱「近・現代短歌研究案内」（『鑑賞日本現代文学 現代短歌』（1983、角川書店、388～389頁）は歌人間の〈共鳴、同調、反発、対抗、無視等々〉まで考察することを提言する。
- 6) 「集団」（『マイベディア』1994、平凡社、653頁）

メンバーシップによって画しうる者ばかりではない。「限界芸術」（鶴見俊輔）としての側面を持つその文芸には⁷⁾、普段は各々の生業にはげみ、歌への取り組み方も多様である、無量無数の人々が参加する。だとすれば、歌の集団＝結社（人）と限定し、思考の対象を狭めることは有意義ではない。むしろ本稿では「集団」未満、必ずしも「専門歌人」といえない人々の「よむ」営みに目を向ける。彼ら彼女らが、それぞれの日常において歌とどう関わったか、生活の過程で働く歌の共同性を捉えるために「つながり」の語を使用する。

1. 研究資料の設定

如上の議論を始めるにあたり研究資料を定めておく。第一に人々の具体的な作歌経験、歌人たちが残した自伝や日記の類を重要視すべきだろう。本稿はそれらを出来るだけ取り集めて使用した。資料名はそれぞれの引用箇所に記載した。

第二に、これまで著されてきた多くの作家論や評伝なども適宜参照する。歌人の履歴を綿密に調査したドキュメントにも、その人が他者とつながりながらよんでいた事跡は見出されよう。特に本稿では、現時点における近代歌人論の集大成と言うべき『短歌シリーズ 人と作品』全24巻（1980～1982, おうふう）をしばしば用いた⁸⁾。

ただし、自伝や日記の残る歌人は多くないし、これまでに著された作家論や評伝も〈国民的な人気のある歌人や、大結社の歌人〉に偏る傾向を持つ⁹⁾。

7) 「限界芸術」とは〈非専門的芸術家によってつくられ、非専門的享受者によって享受される〉、また〈職業として芸術家になる道をとおらないで生きる大部分の人間にとって、積極的な仕方に参加する芸術〉の一形態である。『鶴見俊輔集6 限界芸術論』（1991、筑摩書房、7頁）より。

8) 独立した巻を割り当てられている歌人は正岡子規、佐佐木信綱、与謝野晶子、与謝野鉄幹、窪田空穂、伊藤左千夫、長塚節、若山牧水、北原白秋、石川啄木、土岐善麿、斎藤茂吉、島木赤彦、太田水穂、釈迢空、会津八一、土屋文明、佐藤佐太郎、近藤芳美、宮柊二の20名。

9) 菱川善夫「どんなテーマがあるか」（『国文学 解釈と教材の研究 短歌創作鑑賞マニユアル』（35巻11号、1990・9、170～171頁）

ゆえに、第三として、次の(A)～(C)の資料を用いることで、より多数の作歌経験をカバーしたい。

- (A) 「歌壇名家の追憶」(「短歌雑誌」1924・3～1924・12)
- (B) 「私が歌を詠み初めた動機」(「短歌雑誌」1925・10～1925・12)
- (C) 「作歌の動機」(「短歌研究」1931・11～12, 1932・3)

(A) 「歌壇名家の追憶」は「短歌雑誌」に掲載されたもの。計10回のシリーズ、10人の証言集である。そのうち7回分のタイトルに〈歌を作り初めた頃〉とある。

〈歌壇名家〉とはどのような人々だったか。(A)の掲載と比較的近い時期に刊行された『昭和歌人名鑑』(1929, 紅玉堂)および『短歌年鑑』(1931, 短歌月刊編集局)で確認すると、彼らは結社を主宰しているか、大結社の重鎮クラスだった¹⁰⁾。〈名家〉たちの証言には毎回、少なくとも3200字以上、4頁から6頁が割かれている。

次に(B)「私が歌を詠み初めた動機」も「短歌雑誌」に掲載。こちらは読者の投稿企画で、計14人の証言集となっている。一人につき平均1000字ほどの分量で、誌面では1頁に3段で組まれた。

ただし、投稿者たちの履歴を明らかにすることは難しい。先述の名鑑、年鑑に掲載されているのは(25)尾池孤舟(*生年不明)のみ。念のため『現代短歌大事典』(三省堂, 2000)も確認したが(15)大屋夕陽が立項(*大屋正吉の本名で掲載)されるだけだった。

その大屋は1908年生まれ。(B)に1922年に15歳で歌を始めたとあるから記事掲載時点で17, 8歳。歌歴は3, 4年程。また、他の投稿者にも〈歌を作り始めたのは、極く最近の事〉(柏原哲二郎)、〈歌を詠み初めてから早や三年〉(羽衣天人)などの発言がある。ここから推測すれば、(B)は作歌

10) どちらの書にも木下利玄の名はない。刊行時すでに没していたからである。

を始めて間もない若手が歌との出会いを語った資料とみなせる。

最後に (C) は「短歌研究」に三回掲載¹¹⁾、34人の〈作歌の動機〉が集められている。名鑑と年鑑を併せて用いれば全員の名が確認できるので当時一般に「歌人」と認められていた人々と考えていい。(C) は編集部からの質問に対し¹²⁾、めいめいが自由な体裁で返答したものらしく、字数は40字程の人もいるし250字程の人もいる。

この (A) ～ (C) より新たに58人のデータが得られた。ただし、ここには今では知られていない人も多く含まれるため、次頁に【表1】を作成し、(1) ～ (58) の整理番号と氏名、生年、出生地、職業、所属結社、著作物等を掲出した。

2. 家族とのつながり

人をはじめに「よむ」ことに向かわせた動因はなんだったのか。多くの歌人が幼年期における家族との関わりを証言する。たとえば、【表1】の整理番号で(31)、印東昌綱(1877生)である。

父(佐々木弘綱)の教をうけて、はじめて歌らしいものを詠んだのは六歳の秋であつた。…(中略)…今でも古い短冊の中に、六歳より十歳まで年齢を記した自分の短冊が数枚、おぼつかないながらに歌のかたちをなして、昔なつかしい記念をとどめてをる。

昌綱の証言には、残念ながら、佐々木弘綱の教の内容は語られていない。しかし、上の小文からでも愛息のかたわらで〈おぼつかないながらに歌のかたちをなし〉た習作を共に喜び、短冊に記すことを求めた父歌人の姿はほう

11) 現存する「短歌研究」の前身。改造社が1931年10月より刊行した『短歌講座』全12巻の月報。

12) 2号(1931・11、16頁)「編集だより」に〈諸家の作歌動機を伺ふことは親しいものだと思います〉とある。

【表1】資料(A)～(C)より58人の歌人たち

No.	氏名	生年と出身	職業	所属結社、グループ、著作物など。
(1)	橋田東声	1886/高知	大学講師(日本大学)	「霸王樹」主宰、歌集『地懐』他。
(2)	吉植庄亮	1884/千葉	農業	「橄欖」主幹、歌集『寂光』他。
(3)	木下利玄	1886/岡山	子爵。教師としても勤務。	「心の花」、歌集『銀』他。
(4)	西村陽吉	1892/東京	出版業(東雲堂)	「芸術と自由」主宰、歌集『第一の街』他。
(5)	尾山篤二郎	1888/石川	著述業	「自然」主宰、歌集『さすらひ』他。
(6)	石樽千亦	1869/愛媛	帝国水難救済会理事	「心の花」、歌集『潮鳴』他。
(7)	土岐善麿	1885/東京	新聞社社員(朝日新聞)	「白菊会」、歌集『NAKIWARAI』他。
(8)	依田秋圃	1885/東京	材木問屋主事	「あけび」、『林間歌集』その他。
(9)	河野慎吾	1893/兵庫	会社員	「とねりこ」主宰。北原白秋に師事。
(10)	植松寿樹	1890/東京	教員	「国民文学」、歌集『庭燎』他。
(11)	柏原哲二郎	—	—	—
(12)	伊藤哲雄	—	*『昭和歌人名鑑』には原住所(富山県)のみ記載。その他は不明。	
(13)	潮篤	—	—	—
(14)	安原その	—	—	—
(15)	大屋夕陽	1908/神奈川	—	「橄欖」同人、吉植庄亮に師事。
(16)	中村十九四	—	—	—
(17)	島田朝治	—	—	—
(18)	大西伊三郎	—	—	—
(19)	平岡葉平	—	—	—
(20)	羽衣天人	—	—	—
(21)	生咲義郎	—	—	—
(22)	平賀しげる	—	—	—
(23)	岩間驍城	—	—	—
(24)	尾池孤舟	不明/高知	文具商	「自然」台中支社設立、「竹筏」発行。宮地花弟に師事。
(25)	飯田莫哀	1896/神奈川	公吏(帝国水難救済会職員)	「霸王樹」同人、前田夕暮に師事。
(26)	氏家信	1882/宮城	医師	「白檜」同人、佐佐木信綱に師事。
(27)	須藤泰一郎	1889/群馬	看板業	「霸王樹」同人、歌集『瑞垣』。
(28)	山上、泉	1880/長野	大学教授(立正大学)	「かぐのみ」経営、歌集『久遠の春』他。
(29)	赤木邦輔	1897/愛知	出版業(白帝書房)	「短歌月刊」経営主任、「つきくさ」編集。
(30)	高草木暮風	1893/群馬	理髪業	「短歌建設社」同人。かつて「露台」発行。
(31)	印東昌綱	1877/三重	歌と書とを教える	「心の花」編集。歌集『磯馴松』、父弘綱の薫陶を受ける。
(32)	浅野泰治	不明/愛知	—	「つきくさ」同人、かつて尾山篤二郎に師事。
(33)	浅野保	不明/岐阜	料理店	「心の花」同人。「名古屋短歌会」にも属す。
(34)	菊池知勇	1889/岩手	「綴方教育」主幹	「ぬはり」編集、歌集『落葉樹』他。
(35)	川上小夜子	1896/福岡	—	「草の実」同人。土屋文明に師事。
(36)	川島園子	不明/フランス	—	「白檜」同人、歌集『新樹』、窪田空穂に師事。
(37)	築地藤子	1896/神奈川	—	「アララギ」同人
(38)	相澤照子	1895/岡山	教員	「あしび」同人

(39)	津 軽 てる	1887/東京	—	「短歌表現」「心の花」同人、歌集『野の道』。
(40)	杉 田 鶴 子	1887/東京	医師	「白櫛」同人、窪田空穂に師事。
(41)	今 中 楓 溪	1883/大阪	教員	「霸王樹」同人、歌集『あかね』。
(42)	土 屋 静 男	1898/長野	新聞記者	「あしかび」発行。
(43)	浅 野 豊 子	不明/大阪	—	「あけび」同人、安江不空、花田比露思に師事。
(44)	阿 部 鳩 雨	1891/群馬	刑務協会 囑託	「霸王樹」同人、歌集『良夜』。
(45)	四 賀 光 子	1885/長野	教員	「潮音」同人、歌集『藤の実』。太田水穂に学ぶ。
(46)	大 坪 晶 一	1904/富山	宝石商	「ポトナム」同人、歌集『曇天と樹木』。
(47)	松 岡 貞 總	1888/埼玉	医師	「匙」主宰、「常春」同人、歌集に『生の滴り』。
(48)	大 澤 雅 休	1890/群馬	小学校訓導	「野菊」主宰、「霸王樹」同人、歌集『竜胆』他。
(49)	千 田 迅一郎	不明/岩手	新聞記者（北海タイムス）	「ぬはり」同人
(50)	茅 野 雅 子	1880/大阪	大学教授（日本女子大学）	歌集『金沙集』
(51)	菊 池 庫 郎	1881/東京	教員	「国民文学」同人、窪田空穂に師事。
(52)	飯 田 兼次郎	1895/京都	新聞社、書店経営	「短歌月刊」社員、「詩歌」同人。歌集『赤い聖書』。
(53)	大 井 廣	1893/長野	教員	「潮音」同人、太田水穂に師事。
(54)	北 見 志保子	1885/高知	—	「草の実」同人、歌集『月光』。
(55)	芥 川 徳 郎	1886/三重	書店経営	「現代生活」同人、歌集『茅花』。
(56)	高 塩 背 山	1882/栃木	神職、教員（小学校）	「ぬはり」同人、歌集『狭間』。
(57)	大 悟 法 利 雄	1898/大分	雑誌編集	「創作」同人、若山牧水に師事。
(58)	久 保 田 不二子	1886/長野	—	「アララギ」会員

* 履歴については『昭和歌人名鑑』（紅玉堂、1929）および『短歌年鑑』（短歌月刊社、1931）を使用。ただし、『現代短歌大事典』（三省堂、2004）も用いて情報を補ったため、表内の情報は必ずしも昭和初期の歌人たちの経歴を反映したものではない。

ふつとされる。弘綱の和歌教育の実態については佐佐木信綱（1872生、昌綱の実兄）の証言を参照するのが良いだろう。

自分は父の晩年の子で、父は歌人にしたいとの考をもつてゐたので、極めて小さい時から歌心を養ふやうに、歌の話やら古歌の暗誦などをさせられた。

そして信綱が6歳の春、弘綱と出かけた京都の寺で読経を聞いていたこと。〈ある感じがふと自分の胸にうかんだので、小声で父にいうた。すると父は、字の数は少ないやうであるが、よく出来た、それが即ち歌といふものである、といはれて、大層嬉しかつた〉と最初の作歌経験についても話

している¹³⁾。その後信綱には『夫木集抜書』が与えられたり、鈴屋の歌会への列席が許されたりした¹⁴⁾。佐佐木家では、かかるかたちで歌人となるための基礎教育が施されていた。

他にも、(8) 依田秋圃 (1885 生) は、母の〈真似事をやつて、母になほして貰つた〉と語る。その母は松の門三草子 (* 幕末から明治・大正期にかけて著名だった女性歌人) の弟子だった。(28) 山上、泉 (1880 生) も、〈信州飯田で和歌の師範らしいことをしてゐた〉父を〈見やう見まね〉して育つたという。また、与謝野鉄幹 (1873 生) が〈歌を作り初めたのは七八歳の頃父から教へられたのです。父は本居派の国学者で、宣長の学問には服したが、歌は真淵を崇拜して居ました〉と語るのも、上に挙げた例に近い¹⁵⁾。国学者など和歌の熱心者が親族にいて、その人を真似たり、教えられたりして作歌に入ったケースである。

しかし、かように意識的な歌学びではなくても、家族がしていた表現活動から顕著な影響を受けることもあった。なかでも漢詩に親しんだ経験が、後の作歌活動につながつたと語る人は多い。たとえば、〈父が漢学者で、漢詩などをもてあそんでゐた関係上、自然文学的に傾いたものと見えます〉という (35) 川上小夜子 (1898 生) の例。あるいは、〈父が古い歌を作つたので (主に漢詩だったけれども) そんなことが幼心に沁みこんでゐたのだらうと思ふ〉という (53) 大井廣 (1893 生) の例。また、〈三人の兄があつて共に漢詩の愛好者であつた。叔父も漢詩人であつた。私は多量にその影響を受けて小学生時代から作り初め〉、やがて〈漢詩の趣味が、おのづから和歌に及んで、独りで古今集を読んだり、下手に三十一文字を並べ) 始めた (41) 今中楓溪 (1883 生) のような人がいる。

さらに家庭の習慣や娯楽の時間が、知らず知らずのうちに歌への興味、関

13) 佐佐木信綱「おもひでぐさ」(『和歌百話』1918, 博文館, 601頁)

14) 佐佐木信綱『ある老歌人の思ひ出』(1953, 朝日新聞社, 11~12頁)

15) 与謝野鉄幹「作歌経歴談」(『国文学』57号, 1903・9, 13頁)

心を育てていたケースにも注目しておこう。

とにかく私の母が歌を作らせる動機を与へたことは事実です。毎年正月になると、母の発意で百人一首の貝合せを催すことが慣例のやうになつてゐましたのと、母が百人一首を悉く暗誦してゐたことに感服してゐた私が、どうかして母位に上手になりたいといふ、負けぬ気を持つてゐたことを思ひ出されます。

(9) 河野慎吾 (1893 生) の母は、旧赤穂藩で城代家老を勤める一族の出身だった。その母が主導して正月には百人一首の貝合わせが行われた。河野は、百首の歌をそらんじていたという母への敬意と、母に後れまいとする〈負けぬ気〉が〈歌を作らせる動機〉になったと話している。

幼少期における百人一首体験を語るのは河野ばかりではない。たとえば、(10) 植松寿樹 (1890 生) の家では祖父母と父が歌を詠んだ。かつ家庭には〈古今集の春夏の歌を歌留多にしたのがあつて、正月には必ず出しかけたものだつたが、そのせいで、百人一首と同じやうに古今集の歌も暗記してゐた〉。そのうちに〈歌の組立法を何時とはなしに会得〉していたともいう。

他にも、斎藤茂吉 (1882 生) には幼年時を回想した歌に〈ゆるし給へ失せし祖父よ、抱かれて百人一首を誦せし我はも〉があるし、北原白秋 (1885 生) は「〔天智天皇秋の田の〕といふあの百人一首の歌やでとろりとろりと寝かされたものでした」と書いている¹⁶⁾。太田水穂 (1876 生) は〈冬の夜など炬燵にあたりながら細い洋燈の下で横に寝ながら父から聴かされた百人一首の歌〉を〈非常な悦びの心を以て聴いた〉と記している¹⁷⁾。尾上柴舟

16) 斎藤茂吉の守屋富太郎宛書簡 (1901・1・7 付) より。この歌は本林勝夫『斎藤茂吉』(1980, 桜楓社, 14 頁) の記述より教えられた。北原白秋の回想は「日本の子供たちに」(『季節の窓』1925, アルス, 352 頁) より。

17) 太田水穂「思ひ出の記」(太田五郎他編『太田水穂全集 10 卷 (雑纂篇)』(1959, 近藤書店, 206 頁))

(1876生)は七、八歳の頃に「歌がるた」をとるための予習として〈母からよく百人一首を^マ読む^マでかかせてもらつた〉という¹⁸⁾。釈迢空(=折口信夫, 1887生)に至っては四歳にして百人一首を悉く暗唱したとされる¹⁹⁾。また山本友一(1910生)の〈私は今まで機会あるごとに、短歌との出会いは石川啄木に始まるように書いてきたが、実はそうではなかった。作歌に直接いざなされたのは『啄木歌集』にちがいがなかった。だが出会いと言えば如上曾祖母が唱えて聞かせてくれた小倉百人一首と言った方が正しいようである〉との証言も見逃せない²⁰⁾。

これまで、百人一首が近代歌人にどのような影響を及ぼしたかという問題は十分に論じられて来なかった。その理由は、「新派」和歌(のちの近代短歌)が王朝和歌とりわけ「古今和歌集」を尊重する御歌所派歌人を否定するところから開始された点に関わるのだろう。子規に言わせれば、百人一首は〈悪歌の巢窟〉だったのである²¹⁾。しかし、こうしてみるとその影響は思いのほか大きい。人々は各々の幼・少年期に家族とのつながりという基層の上に立って百首の歌に触れた。かるたとしての競技性や娯楽性にも助けられて、その文芸への理解と親しみを徐々に深めていったのである。

3. 地域で学校で

人々を「よむ」ことに向かわせるつながりは、それぞれが居住する地域にも存在していた。とりわけ学校において、教師たちの果たした役割は注目に値する。たとえば、(13)潮篤(生年不明)の場合を見よう。

18) 尾上柴舟「柴舟自叙伝(5)」(『短歌月刊』3巻12号, 1931・12, 80頁)

19) 「釈迢空略年譜」(千勝重次・岡野弘彦『釈迢空』1981, 桜楓社, 314頁)

20) 山本友一「強靱な生活者の歌を」(『私の短歌入門』1977, 有斐閣, 11頁)

21) 子規が「再び歌よみに与ふる書」(『日本』1898・2・14)において〈貫之は下手な歌よみにて古今集はくだらぬ集〉と喝破したことなどを想起する。子規の「百人一首」評は「歌話」(『日本』1899・7・26)より。

教科書の和歌を〇先生はその得意の音調で朗吟して下さった。人並に感受性もあり、相当予備的知識をもつてゐた私は此の歌に心惹かれた。作歌の衝動とでも云つたものが叢々と起るのを覚えた。私は行きなりノートに歌らしい物を書いた。

ある日の授業中、〇先生による歌の朗吟は潮の若い耳を打ち、〈作歌の衝動〉を喚起させた。彼は〈行きなりノートに歌らしい物〉を書きつけた。その後、それを〈綴方の時間に先生に示〉すと、先生は〈ひどく気に入つた〉と見えて他の生徒の前で作品を賞賛した。このときの感激が潮に歌人としての一步を踏み出させたのだった。

他にも(37)築地藤子(1896生)が小学校時代の二人の先生から〈すぐれた情操教育を与へられた〉こと、(51)菊地庫郎(1881生)が中学の教師から〈「万葉集を読まなければいけない」〉と諭されたこと、(15)大屋夕陽(生年前掲)が自作の歌を〈殆ど毎日の様に学校の先生に見て頂いた〉ことなどを証言している。このように後に歌人となった人たちは、生徒時代に教師から歌に関わるレクチャーを受け、自ら創作する喜びも知っていった。ただし、その感化は教師から生徒に向けられた一方向的なものでなかったはずだ。潮の歌を〇先生が激賞したのは、その歌が先生を感動させたからだった。大屋の歌を先生が毎日のように見続けたのは、生徒の熱心さがどこか教師の胸を打ったからだろう。主体間の相互作用がなければ、人に「よむ」ことを続けさせるつながりは生成されようもない。

また、教師は直接的な作歌指導にあつただけでもなかった。書物を子弟に紹介し、「よむ」ことへの興味を掻きたてもした。たとえば、土屋文明(1890生)の証言がある。

僕の小学校の時——当時の高等科二年今の尋常六年の先生に中沢愛之佑先生といふ人があつた。…(中略)…此の中沢先生が夏の講習に東京へ出た

さきからホトトギスを一冊送つてくれた。何の事なしにそれを読んだ。巻頭には蕪村句集輪考が載せられて、子規の名もまだ列ねられてあつた。

「巻末雑記」(『ふゆくさ』1925, 古今書院, 13~14頁)

中沢愛之佑は、出張先の東京から、群馬にいた教え子文明のもとに「ホトトギス」一冊をわざわざ送った。後に文明は子規系の「アララギ」派を代表する歌人になるが、子規の文業と文明を出会させたのがその熱心な教師だった。上の引用部に続いて文明は〈周囲では子供で雑誌など買ふものはなく、中学に行つて居る年長者がやつと一部十銭の少年世界を一年に一冊買ふ位であつた〉とも記すが、彼の生活環境のなかで「ホトトギス」を手にとることがいかに例外的で、教師の心配りなくしてはありえない体験だったかがわかる。

さらに古泉千樞(1886生)や藤澤古実(1897生)らにも同様の例がある。千樞は千葉の小学校高等科在学時、訓導の安川文時より作歌指導を受けていた。安川が歌誌「心の華」を愛読していたため、千樞はそれを借用して見ることが出来たという²²⁾。また、古実も長野の小学校在学時に若手教師の伊藤蓋により「アララギ」を見せられたことで作歌への興味を引き出されている²³⁾。

永嶺重敏が指摘しているように、1901年には10万に達していた地方の小学校教師たちは、雑誌メディアを通じて中央の教育界や文壇の新傾向を貪欲に吸収しようとしていた²⁴⁾。教師達はそれらのメディアをさらに子弟の訓育にも転用した²⁵⁾。彼らの手引きによって文明や千樞、古実といった少年たちは文学への目を開かれたのだ。

22) 玉田登久松『古泉千樞探索』(1982, 沖積舎, 50頁)

23) 下平武治「耕平と古実」(『短歌』1993・6, 168頁)

24) 永嶺重敏「田舎教師の読書共同体」(『雑誌と読者の近代』1997, 日本エディタースクール出版部, 77~94頁)

25) 田山花袋『田舎教師』の主人公で埼玉羽生にいて「明星」を愛読した林清三のことなども想起する。

しかし、これらの例とは逆に、教師の言動や振るまいが歌を忌避させる原因になる場合もあった。(14) 安原その(生年不明)が女学校時代の苦い思い出を語っている。

女学校五年の時、たまたま先生より課された歌題は桜とか云ふのでした。どう詠んだか忘れましたが、「あの優しい姿あの沢山の人を喜ばせた桜もこんなに葉ばかりになつて花の御殿は毛虫の住家となつた。」と云ふ意味を詠つたのでした。其時一番良い歌と一番悪い歌とが声高々と読まれたのですが其最も悪い歌は私の歌でした。

教師は、この後さらにもう一度〈一番悪い歌〉として安原の作品を読み上げた。すると〈皆様は声をあげてどつと笑つた〉。以来、彼女は〈和歌の時間となりますと一つの恐怖に襲はれ〉るようになった。この例において教師は安原の歌を学級のなかで最も拙劣なものと同ラベリングした。そして自身の歌は安原のそれよりも勝っているという優越感を持ったクラスメイトとともにそれを笑うことで、彼女に作歌に対する恐怖感、トラウマを植え付けた。「よむ」ことと疎遠になった安原が、その後に再び31文字に親しむようになるまでは、〈学校を卒業後嫁となり母〉となるまでの長い時間が必要だった。

本節の終わりに、地域の神職とのつながりから歌を「よむ」ことに導かれたケースも補足しておく。たとえば、(55) 芥川徳郎(1886生)である。

郷里三重県亀山真澗神社ますみの社司で漢学者の山崎重樹翁(林鶴梁の門人)に素読を受けましたが、翁は和歌も詠まれて門下に蓬萊社という月並歌会があり、当時手ほどきをしてもらったのがそもその初ママりであります。

このように芥川は、郷里の神社に仕えていた神職の手ほどきをうけて歌への道を歩み始めた。神職が地域において短歌会を主宰し、それが一種の私

塾、歌塾となって、のちの歌人を輩出した例である。これは尾上柴舟のケースにも当てはまる²⁶⁾。柴舟は12、3歳の頃、地域の大隅神社（岡山県津山市）の神職だった直頼高のもとに同級生とともに通った。しかし、歌を学び続けるうちに、古歌や複雑な文法を知らなければ歌を作ることはできない、〈子供の私には到底できさうもない〉と失望してしまう。しかし、ある日、頼高が歌を被講する声を聞いていると〈涙がほろほろ滾れて来たもので、歌はいゝものだなと感心した〉。頼高は普段から神職として祝詞もあげていた。その美声を聞いて、思わず落涙した柴舟は〈また歌を作りたい気持を唆られ〉²⁷⁾、「よむ」ことへの関心をつなぎ得たのだった。

ところで、この柴舟の例は、前述（13）潮の例とあわせて考えておいてもよからう。興味深いのは、指導者による朗吟や披講といった営為が潮や柴舟を歌に親しませ、その後の作歌活動継続に寄与した事実である。つまり人と指導者、人と歌を結びつけたのは文字テキストばかりではなかった。耳朶に響く歌の力、声の力もそれらのつながりを下支えていたのである²⁸⁾。

4. 投書行為とつながりの力

早くに佐佐木幸綱は〈紙誌への投稿〉による新人の登場について、〈江戸期以来の、入門し、稽古し、師に次第に認められ、というかたち〉と大きく

26) 地域の和学者が歌塾をひらき作歌指導者を兼ねたケースは樋口一葉（1872生）が入門した中島歌子（菽の舎）、伊藤佐千夫（1864生）が通った関澄桂子（桐の舎）の例などがある。藤井公明『樋口一葉研究』（1981年、桜楓社）、関礼子『「菽の舎」と樋口一葉——明治宮中文化圏からの離陸』（『文学』6巻5号、2005・9）、また大塚美保『関澄桂子——千住時代森鷗外の交友圏』（『鷗外』96号、2015・1）などに詳しい。また、松村英一も「松村英一座談」（『短歌』13巻2号、1966・2、29頁）にて16歳時、奉公先の裏手に住んでいた和学者・歌人の塙忠雄に教えを受けた旨を語っている。

27) 尾上柴舟「柴舟自叙伝（5）」、注（18）に同じ。「作歌生活四十年の昔物語」（『短歌雑誌』13巻11号、1930・11）参照。

28) 声の力が人々を結びつけ集団にする効果については、ウォルター・オング/桜井直文ら訳『声の文化と文字の文化』（1991、藤原書店、157頁）が論じている。

異なる〈近・現代短歌の一つの大きな特色〉と指摘していた²⁹⁾。おそらくこの指摘は正しい。本稿で検討対象とした多くの近代歌人も、たとえばA～Cの資料に現れた58人のうち28人が投書経験に触れていた。しかし、その行為にも人に「よむ」ことを促すつながりの力を見出すことができる。

〈投書のきっかけ〉

そもそも人はなぜ投書を始めるのか³⁰⁾。太田水穂（生前掲）の例を見てみよう。

十六歳の秋——高等四年の秋——から私の組の受持になつた先生は、この年の春長野の師範学校を卒業したばかりの若い先生であつた。…（中略）…其のH先生は「少年園」に投書した自分の文章を教場へ持つて来て皆に読んできかせた。その文章は和文と漢文とをまぜて書いてあつた何かの論文であつたと思ふ。投書と云ふ事を覚えたのはこの時であつた。

太田水穂「思ひ出の記」（書誌は注17）、208～209頁）

水穂16歳の秋は1891（明治24）年のこと。新任のH先生自身が投書家だったことから、水穂は〈投書と云ふ事〉をはじめて意識した。その後、師範学校に進学した彼は〈歌を作ることに熱心〉になり、〈種々の雑誌などに

29) 佐佐木幸綱「近・現代短歌の背景」（『鑑賞日本現代文学 現代短歌』（書誌は注(5)、8頁）。また、投書については「新声」や「文庫」などの投書雑誌が〈明治末期から大正にかけて業績を積んだ歌人たちの有力な揺籃〉だったことが指摘されてきた。木俣修「文庫」（伊藤嘉夫他編『和歌文学大事典』1962、明治書院、877頁）、小林幸夫「秀才文壇」（小池光他編『現代短歌ハンドブック』1999、雄山閣）など。

30) 紅野謙介『投機としての文学 活字・懸賞・メディア』（2003、新曜社、92～116頁）に明治後期に投書熱が高まった背景についての指摘がある。一つは日清戦争後、増加した新聞・雑誌などのメディア、ジャーナリズムの側が書き手を求めたこと。一つは学校教育によって読む/書く行為を内面化した青年たちが「立身」への夢を描きながら自らを書き手の位置に押し上げようとしていたこと。つまり、ジャーナリズムと青年達のニーズが重なってその行為が流行した。

も歌を送るようになった。

投書が他者との関わりから始められていることは、水穂と同じ長野県東筑摩郡の出身で、若い日ともに作歌に励んだ窪田空穂（1877生）の例からも確認できる。

私は暗中模索の心で試作したある数の歌を水穂に示すと、彼は「これあ歌じゃない、体を成していない」と云うのであった。…（中略）…しかし私には、水穂の評を全面的に承認できないものがあつた。彼以外のもっとましな人に聞いて見たい、との押しの強さがあつた。

そこで空穂は〈以前から「文庫」の読者になっていたので、心親しいものがあつて、「文庫」に投書した³¹⁾。これと似た例としては、当時福岡にいた水野葉舟（1883生）が自作を無断で添削した中学校教師への反発から、やはり「文庫」に投書している³²⁾。

ある集団においては通常、複数の価値が併存している。空穂や葉舟は自らと異なる価値や感性に直面し、それへの反発を覚えたことで、自分の歌の真価を認めてくれる別のつながりを外部に求めた。当時、地方にいた彼らは投書先の「文庫」において選者の与謝野鉄幹と出会い、〈稀れな優遇〉（空穂）、あるいは〈極めて懇切な評〉（葉舟）を受ける。そのことが契機となり、やがて上京して新詩社に加入する。その例からいえば、投書は、彼らをそれまでの地縁や学校縁を基盤とする創作環境から離脱させ、東京での新しいつながりへと結びつける一通路となっていた。

〈歌および作歌主体の「つながり」〉

投書される歌、また投書する主体には、いかなるつながりの力が関わって

31) 窪田空穂『わが文学体験』（1999、岩波書店、36～37頁）

32) 水野葉舟「新派の歌の生れた時」（『短歌雑誌』1巻2号、1917・11）

いたのだろうか。古泉千樫を例に考えておこう。現在では「アララギ」の歌人として知られる千樫だが、同派入会以前の1902年（数え年で17歳時）には小学校に勤めながら、歌を「万朝報」や「こころの花」に投書していた。当時の彼の様子は、その日記から窺い知ることができる。（*以下、日記は注22）玉田登久松『古泉千樫探索』より。読解の便を考え、「」と句読点を付した。）

「こころの花」五の二来たりぬ。おのれの「池」とふ題の歌、秀逸にえらばれぬ。

2月6日（171頁）

「こころの花」誌（1902・2）の課題短歌において〈秀逸〉と評価された、〈水あをき山かげのいけをとめ子が身を投げしとふ山かげのいけ〉に関する記述である。この短い引用からも、〈おのれ〉以外の他者とのつながりがいくつも見て取れる。たとえば、「池」という題は誰が定めたものか。もとはといえば、その歌も題者により創作意欲を喚起させられた結果詠まれたものではないか。そして、〈おのれ〉の作を〈秀逸〉に選んだ者は誰か。選者の意向がなくては歌は採られず、よって活字化されず、人の目に触れる機会もなかったのではないか。こうした問いを重ねて、あらためて確認できることは、〈水あをき〉の歌がこの世に在るためには他者とのつながりが不可欠だったという、当たり前の事実である。

さらに言えば、〈おのれ〉以外の他者は、千樫の創作の過程においてもすでに介在していたのではないか。引き続き千樫日記を例に検討していこう。

「暁擣衣」といふ左の歌、万朝にて一等になりぬ。

朝月夜光うする、霧のうちに燈火見えて衣うつなり

10月15日（220頁）

引用中の「^{あかつきのとうい}暁擣衣」は歌題、〈万朝〉とは「万朝報」を指す³³⁾。千櫨はその題で〈朝月夜〉の歌を詠み、一等に選ばれている。歌では「暁擣衣」という伝統的な歌題の「^{ほんい}本意」に則り、離れて暮らす夫を思い続ける妻を作中の主体に据え、彼女が夜明けごろに砧を打つ様子を表現した³⁴⁾。

しかし本意を表現することは結局、古人の着想に倣うことである³⁵⁾。ゆえにその行為は、近代短歌側の実情・実景を尊ぶ価値からは、〈古人の着想に妄従して自己を没却〉するものと批判される³⁶⁾。だが、古典的な和歌表現においては、古人の着想を知ることこそがよく詠むための前提条件だった³⁷⁾。

上の千櫨の行為を、あらためて本稿の文脈のなかで捉え直すならば、彼は「暁擣衣」題を表現するために、過去の歌人が残した情感とつながることを選択したと言える。結果、〈朝月夜〉の歌は、すでに存在していた本意と、千櫨の手持ちの語彙や語感とをすりあわせて制作された。その意味において、一首は過去の無数の歌人と千櫨の共同的な作歌行為による、いわば“合作”としての一面を有することになる³⁸⁾。

33) 千櫨は同紙の読者文芸欄の常連で、1902年だけでも「閑居鶯」(2・12)、「春天象」(3・1)、「夏社頭」(8・23)、「月」(10・11)、「菊」(10・25)、「枯野」(11・12)、「田家冬」(12・3)、「漁村千鳥」(12・10)の題で詠み、投書、入選していた。

34) 中川博夫「擣衣」(久保田淳・馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』1999, 角川書店, 496頁)

35) 本意は、ある題について〈院政期頃迄の和歌史のなかで繰り返し和歌に表現されることにより、その事物・事象の典型的把握の仕方として歌人たちの間で認知・共同化され、しだいに固定化していったもの〉。「題に関する基本用語事典」(和歌文学会編『〈題〉の和歌空間』1992, 明治書院, 328頁)

36) 与謝野晶子「歌とは何んなものか」(『歌の作りやう』(1915, 金尾文淵堂, 205頁)

37) 自身、桂園派の和歌を学んだ柳田国男「歌と「うたげ」」(『短歌研究』7巻6号, 1938・6)には、〈名歌を残そうという者には、又別の用意が入用である。それには先ず以て時代を知り、如何なる種類の歌が行われ、又讃嘆せられているかを知らなければならぬ〉との記述がある。柳田自身もまた〈最初には古今集をよく読めと教えられ〉たという。

38) 兵藤裕己「和歌表現と制度」(『日本文学』34巻2号, 1985・2, 65頁)では、本意を詠むことは〈ヨミ手の個人的な心・経験の表出を、和歌的世界の共同性に転位する行為〉と評される。

〈投書を契機とするつながりの生成〉

次に、投書が人をどのように結び付けたかという問題にも触れておこう。

(10) 植松寿樹の証言を参照する。

当時中学生だった植松は友人の紹介で、その頃〈少年投書家中の錚々たるもの〉だった高瀬鳶紅（俊郎）と知り合うと、彼から投書に関する様々な知識を注入された。ある日、「電報新聞」について〈懸賞歌壇の清新なこと、選者である窪田空穂氏の傑れた歌人であること、などを教へられ〉、同紙に投書し始める。

やがて、同紙歌壇における投書家同士は連絡を取り合い、互いの居所を行き来するようになった。

かうして出来た友達は、逢へば歌の話だつた。或は直ぐに題を課して歌を作り、互選して楽しんだりした。毎月の作歌数を比較して多いのを誇つたりした。

投書を通じて〈友達〉となった彼らは〈逢へば歌の話〉をし、〈直ぐに題を課して〉簡易的な歌会を行っていた。そして、〈高瀬君は今月は二百作つたさうだ、岡田君は三百首、など、殆ど競争〉しながら作歌実践を重ねた。

注26)でも触れた松村英一（1889生）は植松や高瀬、岡田（道一）らの投書家仲間だった。彼は互いに親しく行き来していた頃のことを振り返り、その親密なコミュニティ形成の背景に絵葉書の流行があったことを指摘している³⁹⁾。投書家たちは、〈日露役を境にして驚くような流行を極めた〉絵葉書を盛んにやり取りした。そして〈一片の通信が機縁で、深い親交を結んだ。

かかる人々のつながりを形容するのに「趣味縁」という言葉はいかにもふ

39) 松村英一「明治時代の追憶（二）十月会の出来た頃」（『過ぎて来た道・これからの道』1997、新星書房、39頁）

さわしいように思われる⁴⁰⁾。本稿の、これまでの記述を振り返って言えば、人々は血縁、地縁、学校縁など、それぞれの生活にあらかじめ存在していたつながりにおいて、歌への親愛の情、作歌するうえでの基礎的な知識や手腕などを養った。歌への興味が持続すると、投書などを通じて知り合った同好の人々と親しく交際するようになった。親—子、教師—生徒といった従来の諸縁が、親密ではあるものの非対称的な関係性を含むのと比べて、水平的で各人が自由に選択できる開放的な趣味縁の方が、より自由で活発な作品生産の基盤となったことは想像に難くない⁴¹⁾。なぜならば近代短歌は、時に、既成の共同体、権威や道徳と自己との緊張関係、葛藤や対立を詠う文学でもあったからである⁴²⁾。

知り合った植松や松村、高瀬、岡田らは直接的な往来を重ねながら、情報交換し、さらに歌会なども重ねて親密の度を増していった。制作した歌数を友人同士で競いあうなかで作歌熱を昂進、白熱させて、お互いをいっそう熱心な作歌活動へと誘引していったのである。

やがて、インフォーマルなつながりである趣味縁は、アソシエーションとしての確固たる外形をとる場合もあった。彼らは、1905年に「電報新聞」の選者窪田空穂を中心とする「十月会」を結成、さらにそれを母胎に歌誌「国民文学」を1914年に創刊する。作歌——投書が、一人一人をつなぎ、やがて特定の主宰者や共通のルールを備えた「集団」に変えた⁴³⁾。若い歌人たちの中心にあった空穂が、作歌活動を継続させる力、歌の〈母胎〉として

40) 浅野智彦によれば〈趣味によってつながる人間関係〉を指す。『趣味縁からはじまる社会参加』(2011, 岩波書店)

41) 趣味縁については、高木悠希「趣味縁の「光」と「影」:「好き」に基づくつながりの両義性」(「公共研究」18巻1号, 2022・3)も参照。

42) 恋愛の情熱や人間の美を鼓吹しつつ旧道徳を相対化した与謝野晶子、自身を束縛する親や家制度などの問題を直視しつつ詠んだ若山牧水、あるいは社会主義に傾斜しながら自己を抑圧する国家の問題を捉えようとした石川啄木の例などを想起する。

43) 1915年4月の「国民文学」に「十月会清規」が掲載されるが、ここには〈短歌の研究を目的とした会〉であること、主宰者は窪田空穂であること、会員の権利や会費などについての記載がある。

「集団」の意義を協調していたことは、本論冒頭に記した通りである⁴⁴⁾。

終わりに

空穂の指摘に導かれつつ、人々の日常における具体的な作歌経験を考察対象にして、人を「よむ」ことに向かわせ、作品を生成させるつながりの力について論じてきた。

本稿が検証して来た歌人は70人を超え、生年の明らかな者で1864年生まれの伊藤佐千夫から1908年生まれの大屋夕陽まで幅広い年齢層にわたっている⁴⁵⁾。とりわけ多数を占めたのは1880年代から90年代に生れた人々だったが、彼ら彼女らの証言を注意深く見れば、その作歌経験のなかで他者との相互的な交渉がいかに重要だったかが理解できる。人々は家庭や地域、学校、投書行為などの場において他者により作歌に導かれた。そして刺激を受けながら作品を生み出し、作歌活動を持続していた。いうなれば、人々はいくつもの重層的なつながりを經由することで「歌人」と成っていったのだった。

上の指摘は、「よむ」ことに実際に関わる人であれば、すでに経験的に理解していることと思われる。しかし、近代短歌研究の領域において、従来の歌人論や評伝などで強調されてきたのは〈天才能・独創的で自律した個人・主体〉としての歌人像だった⁴⁶⁾。対して本稿では、それらのロマン主義的な歌人像を相対化し、共同性のなかで形成される歌人の姿を提起したいと考える。とりわけ近代では、学校とそこで行われる教育カリキュラムや学校教師、新聞や雑誌と言ったメディア、ジャーナリズム等の存在を無視すること

44) 投書を契機に師弟の縁が結ばれた例に(2)吉植庄亮や(7)土岐善磨が「新声」の選者だった金子薫園の白菊会に参加したケースがある。

45) ただし、検討対象となった人びとに大正期や昭和期に生まれた人びとは含まれていない。そのため、その時期に生まれた人々がどのように歌と出会い、いかなる作歌体験を経たのかは別稿を留意する必要がある。

46) ハルオ・シラネ、鈴木登美「はじめに——〈作者〉を再考すること、作者性研究の可能性」(『〈作者〉とは何か——継承・占有・共同性』2021、岩波書店、vi頁)

はできない。それぞれの日常に埋め込まれた、それらの文化的な諸装置が、人々に「よむ」喜びを教え、よみながら人とつながり、生きていく方法を教えたのだった。

とはいえ、すでに現在では空穂のように手放して〈歌の集団を讀ふ〉ことは難しい。つながりの力は、ともすれば、しがらみや束縛に変わる。そこからハラスメントなどの問題も出てこよう⁴⁷⁾。

もう一点、短歌という伝統的な文芸がナショナルな同質性を幻想させ、「臣民」化や「国民」化の文化装置として機能してきた側面も忘れてはなるまい⁴⁸⁾。そもそも空穂の「歌の集団を讀ふ」（書誌前掲）が、18000人の歌人が参加した『新万葉集』（1938～1939、改造社）刊行の社会的意義にも触れながら、タイミング的にはまさに総動員体制下の時代に記されたことにも注意しなくてはなるまい。

すなわち、その文芸がいかなるメンタリティやイデオロギーを醸成したか。そして、より多数の人々をつなげ、駆動させる力を持ったか。専門歌人、歌壇の境域を越え、近代日本の社会において、「よむ」ことに働いた共同性の功罪を見定めていく必要がある。

47) 最近の「短歌研究」（80巻4号、2023・4）では「特集 短歌の場でのハラスメントを考える」が組まれた。

48) この問題を論じたものに、論集『帝国の和歌』（2006年、岩波書店）収載の諸論、品田悦一『万葉集の発明』（2001、新曜社）、内野光子『短歌と天皇制』（1988、風媒社）、松澤俊二『「よむ」ことの近代——和歌・短歌の政治学』（2014、青弓社）など。

The Significance of Connections that Support
“yomu” (Composing&Reading): Reconsidering the
“Group of Tanka Poet” in Modern Tanka

MATSUZAWA Shunji

Until now, modern tanka has been generally regarded as the “tanka of an individual’s era”. Even in this area of research, there are still many publications on traditional theories of artists and theories on works related to artists.

On the other hand, as Kubota Utsubo (窪田空穂) once pointed out, “Praise the group of tanka poet” (“Nihon Tanka”, 1938, 1), the enthusiasm and passion involved in continuing composing It is also true that “group of tanka poets” are a source of inspiration. So, what kind of influence does this group have on the act of producing Tanka? This issue has remained largely untouched in modern tanka research to date. Therefore. This paper reconsiders the significance of “group of tanka poets” in modern tanka, guided by Kuhota’s points. I would like to discuss how the power of collaboration and connection that is at work here generates and sustains the act of “yomu” (Composing & Reading)” among people, and becomes the driving force for creating works.

As materials for consideration, we first looked at autobiographies and diaries left behind by poets, as well as questionnaires and letters published in magazines. I also referred to the many essays and critical biographies of writers that have been written so far. By using these materials, mutual negotiation between people supported the act of “yomu” in various settings such as home, school, community, and letter-writing activities, and created and nurtured new leaders and works. revealed the facts.

Traditional tanka poet theories and biographies have tended to emphasize the image of poets as genius, original, and autonomous individuals and subjects. In contrast, the discussion in this paper is an attempt to relativize these romantic images of poets and propose an image of a “poet” that is formed through connections.

Keywords : communality, marginal art, contribution to magazine,
Hyakunin Isshu

<書 評>

反エリート主義的<メディア人間>から 読み取るメディア研究の「二流性」 —『前田久吉，産経新聞と東京タワー を作った大阪人』を読む

彭 永 成

1. はじめに

本書は『産経新聞』の創業者であり、東京タワーを建てた人物でもある大阪人、前田久吉に着目し、その生涯を取り上げている。一時的に読売新聞を全国紙に成功させた正力松太郎と「東の正力、西の前田」とも称される前田久吉は、関西テレビ、ラジオ大阪を創設し、参院議員も二期務めた。そのほか、千葉・鹿野山のマザー牧場、大阪電気通信大学を作り、関西未来銀行、日航の源流のひとつとなる会社も設立した。功績はこれらも全部ではない。にもかかわらず、戦後日本テレビの創設者として、プロ野球の父、テレビ放送の父、原子力の父まで呼ばれる、神格化した「大正力」に比べて、前田の存在感はかなり薄いように感じる。

その理由について著者は、1 前田は筆の立つ人間ではない、2 産経新聞の経営を最後までやり通せなかったとしている。現在残されている前田関連の文献では、批判的な視線を向けたものもあるが、所詮伝記や前田の一部しか言及しなかったものがほとんどだった。

では、なぜ、今ここで前田を取り上げるのか。

著者の経歴や「あとがき」で明言したように、産経新聞の前身となる南大阪新聞の創刊100周年を控えて、元記者で特派員や編集長も歴任した著者に、産経新聞社から一般的には「社史」とも見なされる創設者の評伝を要請した。しかし、本書は「社史ではない」自由度があると述べる著者によると、本書で前田を取り上げる意味は創刊記念だけではない。

前田を薄暗い歴史から発掘する価値は、4つにまとめられる。1、前田が最初の新聞を創業した大正後期、そこから日本は本格的な大衆社会に突入した。前田はその歴史的な転換期を振り返るのに格好な人物である。2、前田という人物は、関西ジャーナリズムの意味、そして地方と中央、大阪と東京、関西と首都という関係性を問い直す素材としても興味深い。3、前田が〈メディア人間〉の一類型として検討することが可能であり、彼の歴史を追うことで、4、東京のシンボルとして世界有名な東京タワーの意味を、創設者の生涯から再検討することもできる。

では、前田の人生からは、どのような日本近代史が見えてくるだろう。

2. 本書の概要

前田の人生から日本近代史の一面を見出す本書の構成は以下である。

はじめに 大衆社会、大阪、メディア人間

第一章 ここがロドスだ。ここで跳べ—黎明の時代：1893-1920

第二章 夢のように楽しい忙しさ—大衆の時代：1920-1931

第三章 事態楽観を許さず—危機の時代：1931-1937

第四章 「おそろしいほどの」フィクサー—戦争の時代：1938-1945

第五章 敗退の歴史を持たず—復興の時代：1945-1958

第六章 老アントレプレナーの布石—高度成長の時代：1958-1986

おわりに 空からの視線

本稿では、前田の最も知られている功績、産経新聞の創業と東京タワーの

創設に関わる時期に分けて、本書を概観していきたい。

2・1 前田久吉と「産経」：興味旺盛の「大衆」新聞人（1章から5章の前半）

1893年、今ではすっかり都会の様相を呈している大阪の天下茶屋地域は当時、都会のイメージが皆無の農村だった。そこに生まれた前田久吉は、名門小学校は出たものの、明治から始まる市民社会の入り口で必要となる財産や学歴どちらも持ち合わせていなかった。

時が明治から大正に変わり、市民社会から今度は大衆社会に進行のサイン。立身出世というスキームのほか、富や豊かさはビジネスの繁栄によって手に入れるようになった。

・南大阪新聞の誕生

その中、前田はいろんな試行錯誤を試み、新聞販売店の経営にたどり着いた。そのトップクラスの経営手腕は、当時大阪毎日新聞社長の本山彦一にも気に入られた。だが、前田はすでに発行されている新聞の販売のみでは満足できなかった。創刊年をめぐって諸説ありだが、1920年で前田は、産経新聞の源流となる南大阪新聞を創刊した。朝毎などを扱っている新聞販売店経営者として、自ら新聞を発行することは莫大な資金や人的資源が必要で、前田にとっても決して容易なことではなかった。そこで、前田が思う南大阪新聞の位置付けは、「朝日、毎日の併読紙、あるいは朝毎読者へのサービス紙としての新聞」(p.32)であった。こうした迂回は朝毎からも嫌悪されず、本山彦一から大阪毎日新聞のベテラン記者も送り込み、編集に協力してもらった。こんな南大阪新聞が目指したのは、「1人の裏面やスキャンダルなどを種にして、素つ破抜くような内容ではなく、2一般庶民の日常生活と地域社会の発展に役立つような記事が載っていて、3大新聞の目が届かないような地域ニュースの報道に力点を置く」(p.32)、4朝毎の併読紙/サービス紙であった。これを持って、前田は新聞の販売者のみならず、新聞の経営者

となった。

創刊してから、前田は三つのステップを踏んで南大阪新聞をパワーアップし、夕刊大阪新聞への改題を準備した。そのステップとは、まず毎日発行できるように、編集陣の強化、印刷能力の確保、輸送・配達ルートの確立であった。そこで印刷能力のさらなる強化を目指し、第二のステップとしては自社で印刷業を開始した。第三のステップは改題であった。

大阪南新聞、そして後ほどの夕刊大阪新聞を新聞発達史に位置付けて見れば、明治期に福沢諭吉創刊の政論中心の時事新報が人気を呼び、大阪発祥の「中新聞」朝日・毎日は「新聞界を席卷していく」(p.54)。その後、大阪南の農村イメージは南海電車の開通によって一変し、多くのサラリーマンが歩くような都会化が進んでいた。そこで前田が作った新聞は、名を馳せた政論や文芸の専門家もないままに、「読者と時代を見つめるうちに」の「新たな文法、新たな作法」(p.54)を生み出していくものであった。そもそも、前田は何かを伝えたいために新聞を創刊したわけではなく、読者が求めているものを探って、それを載せる容器=形式を作りたくて作ったのである。内容よりも形式を重視する前田は、知識人や論客、政治家とは一色違って、媒介するもの=メディアに重心を置いた根っからの<メディア人間>だった。

大阪南新聞創刊4年後の1924年、朝日、毎日は相次いで元日発行部数の百万部突破を宣言した。日本新聞史における重要な区切りとなったこのころは、本格な大衆社会が到来し、百万部の新聞も売れるメディア社会でもあった。

その百万部売れる新聞の発祥地である大阪が「大大阪」と呼ばれる時代も近づいた。1923年の関東大震災の影響で多くの出版人・文化人が大阪に移住し、大戦景気の影響もあって、1925年で大阪の人口は東京を超えて、世界第六位の大都市となった。夕刊大阪新聞を含む多くの新聞で賑やかな大阪は、「生活力旺盛で、余暇や郊外という概念を理解し、特に知り合いではなくても新聞が日々供給するニュースによって一体感を共有する人々、つまり

<大衆>に支えられていた」(p. 69)。

大衆社会の一つの特徴として、文化の産業化が挙げられる。産業化された文化は、一部知識と教養のある層のみに届けるものではなく、より多くの大衆が喜ばれるものでなければならない。夕刊大阪新聞は大衆の好みに対応する先端を走り、映画欄の創立はその一つであった。

・戦時期の動向

1931年9月18日、日中両軍が戦闘状態に入り、満州事変が勃発した。この時、前田は世相の変化をチャンスとして捉え、夕刊大阪新聞の姉妹紙日本工業新聞の創刊を決意した。夕刊大阪が大衆社会の本格化と大大阪の繁栄という明るい文化を底地にしていただとすれば、新しい新聞は「日本の重工業化と戦争の予感を見据えた」(p. 96)のものであった。朝毎二紙のスキマを狙って地元紙であった夕刊大阪とは同じ元を持っているが、1933年に創刊された日本工業新聞は最初から<全国紙>を志向した。当初は東京と神戸2カ所しか支局は置いてなかったが、1937年版になると、福岡など国内地方のほか、大連、台北などの海外も加え、「<全国>は日本列島にとどまらなかった」(p. 97)。販売地域は拡大していくものの、経営は苦しかった。その苦境を打開するよう、前田は「満蒙大博覧会」を開こうとした。もちろん、「満蒙開拓」のテーマは当時軍部が求めていたが、<メディア人間>としての前田にとってはあくまでも形式としての新聞に入れる内容の一つに過ぎなかった。

大博覧会のおかげで経営の苦境から一息ついた1935年、前田は再び苦境と関わり、大きな仕事に乗り込んだ。それは明治期の名門紙、瀕死状態に落ちた福沢諭吉創刊の時事新報の再建であった。小学校卒の前田自身は慶應閣に関係はなかったが、親しくしている大阪毎日にはつながりが深かった。最初は頑固に断ったが、向こうからの相談を重ねた結果、一年間責任を持って、時事新報新任専務取締役として引き受けた。だが、一年間の試行錯誤を

経て、時事再建は失敗で終わりを告げた。1936年12月25日、時事新報社は解散した。

東京の仕事が一段落したように見えたが、前田はすぐ大阪に戻らなかった。東京日日新聞（大阪毎日新聞系）が新社屋を建てるため、前田を専務として雇った。次は軍部からの圧を受けて、大株主の三菱、藤田組から大量の株を引き受け、毎日新聞社の取締役役に就任した。こちらにも長くにはいるつもりがなかった前田は、1943年に株を整理して毎日から退いた。

話は大阪に戻る。1937年7月中全面戦争の勃発により、新聞統合が総力戦の一環として要求された。大阪では急激な勢いで新聞の整理が行われ、前田はかつて有名だった関西中央、大阪日日などを吸収した。だが大阪時事新報の行き先を巡って、前田はここで宿敵の正力松太郎と正面からぶつかった。当時の正力は大阪時事の多くの株を持っていた。激突した結果、前田は一応勝利を納め、1942年5月1日に大阪新聞が発足した。のちに産経新聞の全国進出の礎石となった大阪新聞は、大阪を主体としたローカル紙であり、「関西地方の人々や資源を戦時動員に駆り立てるための翼賛紙であった」(p. 145)。

一般紙としての大阪新聞の創刊が、大阪における新聞統合のクライマックスだ。それと並行的に行われた経済紙・業界誌の統合の主人公も前田であり、その結果生まれたのが産業経済新聞であった。その母体は、創刊から10年も経ってない日本工業新聞だ。1942年11月1日、大阪新聞より半年遅れて、産業経済新聞が題字も新たに創刊された。創刊辞には戦意高揚を説く文調が見られた。

・戦後：後退の歴史を持たず

敗戦後、GHQは情報局に「新聞及出版用紙割当委員会」を設立し、前田は一委員となった。この時、前田は時事の復刊に取り組んだ。大阪時事はそもそも前田が題号を持っており、東京の時事ほど復刊は難しくなかった。両

紙を再刊させる意図には、自分の手で名門紙をつぶした罪を払うという<公>的意識と自分の新聞を東京進出させたいという<私>情が混ざっていた。しかし、再刊した時事は1955年に産経に吸収され、幕を下ろした。

ところで、翼賛紙としての色合いが濃い大阪新聞、産業経済新聞の経営者としての前田は、もちろん公職追放された。だが、仕事は止まらなかった。大阪電気通信工業学校の再建を引き受け、校名大阪電気通信高等学校と改称した。追放解除の後、前田は理事長も受託した。また、資金調達に苦しんでいる中小企業を助けるために大阪不動銀行を設立し、のちに大阪銀行に改名した。

一方、前田が不在中でも、大阪新聞と産経新聞の重要案件は密かに前田の意見を求めていた。1948年3月、本格的な東京進出に備えて産経新聞東京支社が本社に昇格した。翌年6月、戦後復刊したばかりの大阪時事は大阪新聞に吸収され、合同で大阪新聞は20万部の用紙割当を手に入れた。1950年では東京印刷も開始し、紙面を経済面から一般紙になり、東西の同時発行による全国紙としての基礎を固めた。同年、大阪新聞・産業経済新聞両社の社長に、前田が返り咲いた。

新聞紙上では、正力がなした読売新聞の大阪進出が武勇伝として語られることが多い。だが、産経の東京進出も同等にスリリングだった。日本経済新聞もこの時、大阪進出を図ったが、経済紙という特別の分類で、大阪の新聞販売を支配していた毎日と朝日は、余裕を持って臨んでいた。産経の最初もそうだ。

だが前田の野心は経済紙だけで収まらなかった。そもそも、前田が師として尊敬し、宝塚少女歌劇団の創設者、阪急グループを支配していた小林一三から、産経は経済紙なのかと聞かれた時に、こう答えた。「経済というものは台所から出発すべきもので、家庭の主婦にもお嬢さんに納得できるようなニュースを提供するのが私の新聞づくりの理想だ」(p.169)。その話の如く、産経新聞は一番早く、1950年に「婦人経済欄」を設けた。婦人欄、ス

ポーツ欄などに力を入れて、産経は一般紙として売り始めた。1951年8月10日付東京産経新聞朝刊に、これまでの新聞販売店での共売制に抵抗し、専売制への全面移行を宣言した。もちろん苦戦はしたが、最終的には共売制の崩壊、朝毎読売の「不拡販方針」という一時休戦協定を出すまでたどり着いた。弊も招いた。のちに膨大な販売網を維持するために、資金を絶えずに注ぎ込まなければならないという重荷が前田にのしかかった。

2・2 前田久吉とタワー：「高いところ」を目指しながら（5章の後半から6章）

その重い負担は、最終的に前田が産経を去ることまでつながった。

その前に、前田の絶頂とも象徴するのは、東西本社ビル（産経会館）の建設であった。1952年7月18日、大阪・梅田に豪華な産経会館がお披露目した。南大阪新聞を天下茶屋で創刊して以来、32年の月日が経ち、前田は新聞人として大阪の中心地に君臨するような姿で現れた。1955年3月には東京・大手町に産経会館が建てられ、当時の「東洋一の近代ビル」(p.200)まで称された。

この頃の前田は、政治家としても花咲いた。1953年、前田は参院選全国区から出馬し、当選した。この経歴から、前田は東京タワーを建てることに必要な人的ネットワークを築き上げた。

同時に、大正期から夕刊大阪新聞でラジオ欄を作るほど、興味が強い前田は、公職追放や産経新聞東京進出の販売戦で中々ラジオ事業に手を延べることができなかった。出遅れた前田は今度テレビに執念を燃やしていた。だが、これも出遅れた。産経のみをバックにした「テレビ大阪」は挫折し、最終的には阪急、京都放送、神戸放送を主軸に加え、1958年に「大関西テレビジョン株式会社」が開局した。一方、大阪放送（ラジオ大阪）は関西テレビから4ヶ月も遅れて開局した。

電子メディアへの関心を示す前田により、同年に東京タワーもオープンした。

『前田久吉外伝』によれば、戦争で焼け消された大阪の通天閣が1955年に再建されたことを見て、前田は「もっと高く、もっと大きい」東京タワーの構想を持つようになった。

だがタワーの建設は専門家なきには不可能である。要となっていたのは当時ニッポン放送の技術部に在籍していた松尾三郎という技術者であった。東京タワーは前田の独創ではなく、複数のプランや会社が競合していたことは、『東京タワー50年』などから明かされた。だが、電波塔としての役割を果たす東京タワーを構想できたのは、ラジオもテレビも出遅れて、それぞれの局に拘らず、全ての局が使えるタワーという大きな全体像を描いた前田の強みであった。

前田は「どうせつくるなら世界一を…」といい、エッフェル塔より高いタワーを建設することにこだわった。しかし、実際に構想を具現化したキーパーソンの松尾によると、東京タワーの高さは「関東一円をカバーするテレビアンテナを実装するために設計した結果」(p.216)であり、世界一を意識したわけでは全くなかった。だが前田というメディア人間にとって、「世界一」というわかりやすくかつインパクトのある題目に沿ったストーリーの方が重要だった。

高いところを目指して作ったのは、タワーだけではなかった。1951年11月の時点で産経に航空部を設け、前田は1952年7月に株式会社日本観光飛行協회를発足した。1958年には日東航空と改称した。前田の構想は「新聞航空と民間航空二本立て」であり、航空も新聞のためであった。一方、東京タワーの建設目的も、依然として新聞のため、拡販のためであった。

多くの事業に手を出した前田は実際、この時に莫大な負債を抱え、産経の経営を水野成夫に譲るほかなかった。1958年、前田は産経を去った。

だが新聞を諦めたわけではない。東京タワーに前田は来るべき情報化社会の夢を見て、「東洋一のコンピューターセンター」の役割を託そうとした。1968年5月、前田は東京タワーから小さい新聞EDPジャーナルを創刊した。

EDPとはエレクトロニック・データ・プロセッシング（電子データ処理）の略で、1970年では日本情報産業新聞と改題した。東京タワーは実用的なテレビ塔のみならず、情報化の未来を見据えるものでもあった。テレビ史の文脈だけではなく、東京タワーそのものはやはり広く戦後の日本社会史から捉えるべき存在である。

EDPジャーナルのほか、前田は新聞へのこだわりが深い。1964年6月、「農業の近代化」を目的として、個人的に前田が農経新聞を創刊した。

だが新聞事業はここまでだ。晩年の前田は禅への興味を燃やし、佛母寺、マザー牧場も立てて、東京から離れ千葉県房総山で人生の最後を過ごした。93歳高齢で他界した前田の合同社葬に、産業経済新聞社の名はなかった。

3. 本書の貢献

前田の人生を辿ってきた。ここからは「終わりに」を参考しながら、本書の研究意義を改めて整理していきたい。

3・1 「二流」と「メディア人間」

まずは新聞事業との関わりから見えた前田と産経新聞の位置付けを明らかにしたことである。

戦後から現在まで、産経は朝日、毎日、読売、日経とともに五大紙と呼ばれている。だが、産経とほかの4紙の違いもはっきりである。朝毎読日経はすべて明治期の発祥の新聞であり、原点として明治の気風、市民社会における新聞のあるべき姿の一部分も終始守り続けた。だが、大正期に生まれ、最初からローカルでニッチな情報ニーズを狙った産経の源流の一つとなる産経だけはそれと無縁であった。「典型的な「商業主義」であった」と戦後時事新報が復刊した時に集められた記者の酒井寅吉が前田を評したように、産経は前田の理想、「大衆から愛される新聞」を目指していた。

そのように作られた産経の特徴をまとめると、それは「二流」であった。前田が終始当時社会の一流たる知識人や教養人たちへの挑戦者であり、反逆者でもあり続けた。

高学歴エリートたちからでは前田の小学校卒は軽んじられ、新聞経営者たちの世界では「販売店上がり」とジャーナリストたちが前田を見下していた。自ら新聞を立ち上げたとしても、それらは朝日、毎日ほか「一流紙」を追いかける立場にあった。

また、「二流」という立場の特徴を読み解くと、それはまなごしを常に意識し続けることである。前田はまさにそうだった。新聞もラジオもテレビも、一流に比べて後発組であった前田は、絶えず自分（事業）が周囲からどう見られているかを意識し続けていた。それは、関西ジャーナリズム¹⁾を研究してきた著者によると、「東京からの〈まなごし〉によって自らを規定しがちな関西人の性質」とも重なっている（p. 58）。

このような特徴は、〈メディア人間〉にも合致していた。なぜなら、まなごしを意識する〈二流〉こそが、内容よりも形式を重視するのである。正統派の教養人たちが何を伝えること、つまり内容にこだわるのに対して、新聞人としての前田は中身の深さを追求するより、いかに伝わる方が目立つことを考える。

前田の新聞作りの歴史を考えれば、それは確かに著者が提示する〈メディア人間〉の定義、「末端から頂上に至る長い階梯を、一步一步、順番に登場する権威者に頭を下げ、ルールを受け入れ、認めてもらいながら登っていくという従来の道筋とは異なる、もう一つの行き方だった」（p. 263）に当てはまる。

さらに展開していくと、内容を重視する「ジャーナリズム論的」アプローチと「メディア論的」アプローチがある。ジャーナリズム論が物事の真偽に

1) 松尾理也(2021)『大阪時事新報の研究—関西ジャーナリズムと福澤精神』創元社、400頁。

価値を重じ、規範を重視するのに対して、メディア論は効果の大きさに価値を見出し、いかに人を動かすことに成功したかにこだわっている。前田は明らかに<メディア論的>人間である。

この論点は前田が段々に歴史や人々の記憶から後退し、消えていく理由としても解釈できる。名物のジャーナリストの伝記を読めば、内容を重視しものごとの真偽を追求する彼らのストーリーには感情移入しやすく、感激や興奮を覚える。それに対して、形式、前田の場合はすなわち売れる新聞を作ることこだわると<メディア人間>たちの物語は、読者の感情を喚起しにくい。

前田という人物を歴史から発掘し、その紋切り型のイメージを立体化させたことは、本書の一大貢献といえよう。

3・2 東京タワーと表層性

東京タワーの建設、またはその意味について、前田の人生と特徴を関連づけてみれば、本書は新たな考察視点を与えている。

新聞経営と都市開発、一見無関係のようだが、実際では、すでに言及したように、前田本人によれば、それは新聞のためであった。繋がっているのは、そこだけではない。東京タワーはしばしばテキスト都市論とメディア都市論で取り上げられている。見方はそれぞれだが、文芸作品²⁾も含めて、東京タワーは「良いもの」と表象されることが多い。その良いイメージと同時に、東京タワーもまた過剰とも言える意味を背負っている。この多彩で複雑なシンボルは、表向きは極めて「単純」な大阪商人である前田によって立てられたのも逆説である。東京という多く語られてきた都市のテキストに「こだわりもなければ蘊蓄も持ち合わせない外部の人間であったからこそ、前田

2) 例えば映画『ALWAYS 三丁目の夕日』において、完成した東京タワーではなく建設中の未完成イメージが強調されて…東京タワーは今だに建設中であり、未完成であるというフィクションこそが、永続的な夢と希望につながる…(p. 268)

はその表層性を駆使してメディア都市東京のシンボル」(p. 271)を建てることに成功したのである。

明るくて楽天的、そして気が早い。面白いことを発見したら、正当な理屈を考えるよりもすぐに飛び込む身の軽さを持ち合わせる前田。その「深さ」を追求せずという表層性こそが、大衆社会に生きる新聞人前田と、モダンで明るい雰囲気をもたらしてくれる東京タワーを結びつけた。

前田が代表する一種の大阪精神、あるいは日本の大衆社会の気風について、著者は論じる。「奔放で自由な大阪イズム、あるいは上昇期ブルジョアの論理としての大阪商人の精神は、百年を通じて、中央集権の中心にたる東京の組織性、階層性、政治性に敗北していった」(p. 276)。産経からの退陣という敗退で、「東の正力」のように歴史に名を深く刻むことのできなかつた前田には、「日本全体がその硬直性を脱すべきとされる今、大阪的なものは一つの突破口となる」(p. 276)価値が秘めている。

前田という建設者の経歴から見れば、東京タワーの物語、東京タワーという現代東京の人々に内面化された存在は、地方と中央の関係性を見出すことが可能であり、テレビ史や都市論では収められないほど、日本の近現代社会史の一面を映し出している。本書はこれら未完の課題を提示してくれた。

4. おわりに

本書を読んだ後、これまでぼんやりしていた五大紙の一つとしての産経新聞のイメージが立体化してきた。「保守、右寄り、正論路線」(p. 281)というステレオタイプはなぜ産経が貼られて、またどこか真実と異なるのか。本書の答えから言うと、産経新聞の特徴はむしろ「雑食性」である。この特徴は産経の歴史からきている。夕刊大阪当時、紙面は関西における自由主義者たちが自由に言論を出す場として機能していた。東京産経の母体となる世界日報も戦前の同盟通信の記者たちが理想主義的に立ち上げた新聞であり、前田が東京進出した時に買収された。前田が二度も関わった時事新報は言うま

でもなくオールドリベラリズムを貫いている。だが前田が退陣してから、政治的立場が支配階級よりになり、「正論路線」に寄せていった。結果的に、産経のアイデンティティは、とりわけ大阪という視線から見れば、「ところどころあいまいさや矛盾を抱えたものになってしまった」(p.282)。著者が前田を取り上げる理由に述べたように、前田の人生を振り返ってみたら、そこには産経新聞と東京タワーに関する新たな史実と示唆があった。前田という大阪商人の生涯を辿ってみた結果、日本の大衆社会の一端が見えるようになった。中でも特に興味深かったのは、前田の退陣についての論考であった。前田が持つ新聞経営の限界について、ジャーナリストの酒井は看破していた。「大衆に愛される新聞」について、酒井はこう論じた。「大衆の愛するものはいろいろである。いろいろの大衆の、いろいろな好みに片端から応じていったら、新聞のスペースはいくつあっても足りない。われわれは、時にその好まれそうなものの中から、みずから選択して大衆に「これを愛してください」と提供する義務がある」(p.223)

以上の論述に対して、著者はそれをマス・コミュニケーションの本質を貫いた指摘だと評している。またこうした無限に細分化していくことに対応できるのは、現代のインターネット、ウェブ、SNSであることも指摘した。

インターネットメディアは確かに利用者一人一人の興味に合致するような情報提供ができる。ただし、ジャーナリズムが重視する物事の真偽、価値判断もすべて個人に任せている。新聞の日没が叫ばれて久しいが、毎日朝日読売日経産経という五大紙は、今でもデジタル版、公式アカウントを立ち上げて発行し続けている。ネット時代になった今、新聞とジャーナリズムの関係性はいかなる変容を見せているのか。前田みたいな内容より形式を重視する〈メディア人間〉は、マスが声を上げる時代において、どのような変化を図っているのか。新聞とジャーナリズム研究の現代論も読んでみたいところである。

もう一つは〈二流〉について、常にまなざしを意識することだという定義

への共感である。もともと、著者本人も「<二流>という言葉に自由と明るさを感じるか、それともみすぼらしさや屈辱を感じるか」(p. 262)によって、前田の人生の捉え方が大きく変わると述べている。ここで共感したのは、前田の<二流>ではなく、メディア論、メディア研究の<二流>である。実際、日本の科研費申請システムを見ればわかるように、メディア論、メディア研究という分類は存在しておらず、多くの関連研究者はいつも歴史学、社会学、図書館情報学、教育学に申請書を提出している。また、学会での発表や論文を投稿する場合には、「これは何学？」との指摘を受けた人も少数ではなかろう。まさにメディア研究をしている人たちは、上位の社会学、歴史学などからのまなごしを意識しながら、自分(の研究)はどこに位置付けることができるかを腐心してきた。だが、裏返してみれば、メディア研究の<二流>性は資料の自由、枠組みの自由、解釈の自由として理解することもできる。前田の<二流>性は命の終着で尽きるが、メディア研究の<二流>性はどこまで続くのか。<一流>に昇格する日が来るのか、<二流>のまま学際的、領域横断的な特性を持ち続けるのか。メディアの研究者たちは今後もこのような<二流>性の課題に直面していこう。

博士論文の要旨および 博士論文審査結果の要旨

氏名	21D2102 中川久恵
学位の種類	博士(社会学)
学位記番号	社会博甲第11号
学位授与の日付	2024年3月15日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
博士論文題目	社会福祉学専攻以外の学生を対象とする福祉インターンシップの現状と参加促進の課題 Current Status and Challenges in Promoting Participation in Social Welfare Internships for Students outside Social Work Majors
論文審査委員	主査 川井 太加子 教授 副査 小野 達也 教授 副査 栄 セツコ 教授

<博士論文の要旨>

社会福祉学専攻以外の学生を対象とする 福祉インターンシップの現状と参加促進 の課題

中 川 久 恵

研究の目的

本研究では、多様な人材の確保・育成及び福祉の魅力向上をねらいとし、社会福祉学専攻以外の学生を調査対象とすることで、福祉の魅力が十分に伝わっていない福祉のネガティブなイメージが先行する層、福祉業界を就職先として選択しない実態の検討から得られる示唆が、福祉人材確保の一助となることを期待し、研究を行った。本研究の目的を達成するため、以下の研究課題を4点設定した。

第1は、福祉インターンシップ・プログラム構築の課題を明らかにする。

第2は、社会福祉学専攻以外の学生の福祉インターンシップの参加意向と福祉インターンシップの興味・関心はどのような関係であるかを示し、社会福祉学専攻以外の学生の福祉インターンシップの参加への示唆を検討する。

第3は、社会福祉学専攻以外の学生の福祉インターンシップの興味・関心と福祉インターンシップのイメージの因子から、社会福祉学専攻以外の学生の福祉インターンシップのイメージを可視化する。

第4は、社会福祉施設が、社会福祉学専攻以外の学生を福祉インターンシップで受け入れるプロセスを確認し、福祉インターンシップの意義を明ら

かにする。

上記の研究課題から、社会福祉学専攻以外の学生を対象とする福祉インターンシップの現状と参加促進の課題を検討する。

構成と内容

本論文は以下のとおり、第1章から第6章で構成されている。

第1章 研究の背景と目的

第2章 福祉インターンシップを通じた福祉人材確保に関する先行研究の検討

第3章 大阪福祉人材支援センターにおけるインターンシップモデル事業

第4章 福祉インターンシップの興味・関心と福祉インターンシップのイメージ因子に関する調査

第5章 社会福祉施設が社会福祉学専攻以外の学生を福祉インターンシップで受け入れるプロセスに関する調査

第6章 福祉インターンシップ参加促進への提言

第1章 研究の背景と目的

本研究の背景と目的、用語の定義と構成について、その概略を記述した。本研究の背景を福祉業界の現状を踏まえ記述し、社会福祉学専攻以外の学生を対象とする調査研究の必要性を記述した。これらを踏まえ、本研究の目的を設定した。

本研究では、多様な人材の確保・育成及び福祉の魅力向上をねらいとし、社会福祉学専攻以外の学生を調査対象とすることで、福祉の魅力が十分に伝わっていない福祉のネガティブなイメージが先行する層、福祉業界を就職先として選択しない実態の検討から得られる示唆が、福祉人材確保の一助となることを期待し研究を行った。

第2章 福祉インターンシップを通じた福祉人材確保に関する先行研究の検討

介護人材確保、キャリア理論と職業興味に関わる福祉のイメージ、インターンシップ、福祉インターンシップについて論じ、先行研究を検討した。

先行研究のレビューから、福祉人材確保の新規参入促進において、福祉インターンシップが有効である可能性が高いことが明らかになっている。他業界からの若者の参入を進めていく方法として、インターンシップが非常に重要な位置づけとなっている。また、福祉人材確保と福祉のネガティブイメージは切り離すことができないことが示されている。政府として、若者の参入促進を行っており、さらに他業界からの参入を進めていくことが重要であることが指摘されている。地域医療介護総合確保基金を活用した介護人材確保のための取り組みとして、実施できる施策の一つに、介護事業所での職場体験・インターンシップがある。職場体験・インターンシップは、福祉業界に関する魅力を含め、職場の実情を体験できるものであるが、福祉インターンシップの現状や課題については十分に検討されておらず、社会福祉学専攻以外の学生を対象にした福祉インターンシップの現状や課題を明らかにした研究は行われていない。また、福祉インターンシップ・プログラムの課題を検討せずに、インターンシップ事業が行われている。

よって、本研究では、福祉インターンシップに求められる以下の研究課題4点を設定した。第1は、福祉インターンシップ・プログラムの課題を明らかにする。第2は、社会福祉学専攻以外の学生の福祉インターンシップの参加意向と福祉インターンシップの興味・関心はどのような関係であるかを示し、社会福祉学専攻以外の学生の福祉インターンシップの参加への示唆を検討する。第3は、社会福祉学専攻以外の学生の福祉インターンシップの興味・関心と福祉インターンシップのイメージの因子から、社会福祉学専攻以外の学生の福祉インターンシップのイメージを可視化する。第4は、社会福祉施設が、社会福祉学専攻以外の学生を福祉インターンシップで受け入れる

プロセスを確認し、福祉インターンシップの意義を明らかにする。これらの研究課題4点から、社会福祉学専攻以外の学生を対象とする福祉インターンシップの現状と参加促進の課題を明らかにするために、第3章、第4章、第5章において調査を行なった。

第3章 大阪福祉人材支援センターにおけるインターンシップモデル事業に関する事例

大阪福祉人材支援センターが実施した、2年間のインターンシップモデル事業を基に、プログラム構築の課題に着目した。また、学生の福祉インターンシップへの参加意向と興味・関心について着目した。

第1節では、大阪福祉人材支援センターのインターンシップモデル事業について概要を述べた。

第2節では、A大学単位認定型インターンシップ2021年度受講生50名を対象とする意向確認を行なった。

目的：福祉インターンシップ・プログラム構築の課題を明らかにすることである。

結果と考察：A大学単位認定型インターンシップ2021年度受講生50名を対象に調査を行い、福祉インターンシップ・プログラム構築の課題として5点を確認した。

本調査から、福祉インターンシップ・プログラム構築の課題は、①情報提供の働きかけの検討の課題、②学生の興味・関心に応じて、福祉インターンシップ・プログラム内容の変更が可能であることを考慮する課題、③学生の福祉の仕事理解・業界理解の架橋が必要である課題、④事業者の実施目的と学生の参加目的の一致の課題、⑤福祉インターンシップの多様な開催方法の検討の課題の5点を確認した。

これらの課題に対し、以下、福祉インターンシップ・プログラム構築への示唆を示す。学生の興味・関心に応じて、福祉インターンシップ・プログラ

ム内容の変更が可能である福祉インターンシップ・プログラムの設計を行うことが求められている。社会福祉学専攻以外の学生の一部は、福祉は行わない、福祉の仕事をイメージできないと記述していた。学生が現在学んでいる学部の知識を福祉インターンシップで活かしながら、福祉インターンシップを行うことにより、福祉業界の多様な働き方やコラボレーションを意識できる可能性が広がるのではないか。そのためには、福祉インターンシップを、ソーシャルデザインの視点で実施し、それを可能にする福祉インターンシップ・プログラム構築を行うことが望まれると確認した。

第3節では、社会福祉学専攻以外の学生の福祉インターンシップへの参加意向と興味・関心に関する調査を行なった。A大学単位認定型インターンシップ2022年度受講生44名を対象とする調査を行なった。社会福祉学専攻以外の学生の福祉インターンシップの参加意向と福祉インターンシップの興味・関心はどのような関係であるかを明らかにした。そして、それらに対し、どのような視点が求められているか方略を検討した。

目的：社会福祉学専攻以外の学生の福祉インターンシップの参加意向と福祉インターンシップの興味・関心はどのような関係であるかを明らかにし、それらに対し、どのような視点が求められているか方略を検討することである。

結果と考察：A大学単位認定型インターンシップ2022年度受講生44名を対象に調査を行い、6点の関係性を確認した。

本調査から、社会福祉学専攻以外の学生の福祉インターンシップの参加意向と福祉インターンシップの興味・関心の関係を可視化した。①学生の福祉業界の仕事への異なった職業イメージ、②福祉業界に興味がないことで、福祉インターンシップへの参加へ結びついていない、③福祉インターンシップへの参加意向がない理由は、福祉の仕事へのネガティブなイメージ、④福祉インターンシップへの興味がない理由は、福祉業界への就職との関連、⑤福祉インターンシップへの興味がない理由は、福祉インターンシップ申し込み

時期と関係、⑥福祉インターンシップ・プログラム内容は最初から見ていない、の6点が示された。

これらに対し、福祉の仕事は、多様な働き方があり、他業界とのコラボレーションも可能であることが、学生へ伝わっていないことが窺えた。福祉インターンシップを、ソーシャルデザインの視点で捉え、それらの情報を学生に広げていくことが不可欠であると確認した。また、福祉インターンシップの事前説明会などを設け、福祉の仕事や福祉インターンシップについて説明をしていく必要がある。情報提供では、福祉の知識や情報に加え、新しい技術の活用による介護者の負担軽減や労働環境・処遇の改善の取り組みなどについても、学生に周知していくことが重要である。併せて、身近に参考にできる、福祉インターンシップ体験モデルについて情報提供をしていく必要性を明らかにした。

第4節は、大阪福祉人材支援センターにおけるインターンシップモデル事業に関する事例の小括である。大阪福祉人材支援センターが実施した、2年間のインターンシップモデル事業を基に、第3章では福祉インターンシップ・プログラム構築の課題に着目した。また、学生の福祉インターンシップへの参加意向と興味・関心について着目した。福祉インターンシップを、ソーシャルデザインの視点で実施し、それを可能にする福祉インターンシップ・プログラム構築を行うことが望まれることを確認した。また、福祉の仕事は、多様な働き方があり、他業界とのコラボレーションも可能であることが、学生へ伝わっていないことが窺えた。学生がソーシャルデザインの視点で福祉を捉えることができるような架橋が必要である。それらの情報を学生に広げていくことも不可欠であると明らかにした。

上記の調査から得た研究課題として、社会福祉学専攻以外の学生の福祉インターンシップの興味・関心と福祉インターンシップのイメージの因子を明らかにすることが求められたことから、第4章の調査を行なった。

第4章 福祉インターンシップの興味・関心と福祉インターンシップのイメージ因子に関する調査

A大学キャリア教育科目業界・職種研究2022年度受講生約150名を対象とする調査を踏まえ、社会福祉学専攻以外の学生の福祉インターンシップの興味・関心と福祉インターンシップのイメージの因子を示し、社会福祉学専攻以外の学生が福祉インターンシップをどのように捉えているかを可視化した。それらから、方略を検討した。

目的：本調査の目的は、社会福祉学専攻以外の学生の福祉インターンシップの興味・関心と福祉インターンシップのイメージの因子を確認し、それらに対し、どのような視点が求められているか方略を検討することである。

結果と考察：A大学キャリア教育科目業界・職種研究2022年度受講生約150名を対象とする調査を行い、調査協力のあった93名のうち、興味・関心なしを選択した80名の福祉インターンシップのイメージの因子分析を行った。その結果、7因子が抽出された。学生が福祉インターンシップを経験することで身につけることができる能力について、期待感をもっていることが明らかとなった。

社会福祉学専攻以外の学生の福祉インターンシップへの興味・関心は、興味・関心あり10名、興味・関心なし80名、無回答3名の93名であったことから、興味・関心なしを選択する傾向が強いことが分かる。その一方で、興味・関心なしを選択した学生の福祉インターンシップのイメージの因子を見ると、学生が福祉インターンシップを経験することで身につけることができる能力について、期待感をもっていることが明らかとなった。福祉インターンシップは、まずは、教育的意味合いをもつ福祉インターンシップを実施することが重要である。学生が教育的意味合いをもつ福祉インターンシップへ参加することにより、学習経験し、学習経験のなかで福祉の魅力に気づき、人間的充実感を明確に意識できるような学習支援を受けることで、学生が職員をモデリングし、自己効力感から結果期待をもつことで、興味へ移行

し、キャリア選択に影響を与えていく目標設定、行動選択、就職へ段階的に移行する。教育的意味合いをもつ福祉インターンシップを実施することが、結果的に福祉の人材確保へつながっていくことが推察される。三省合意(2022)「インターンシップを始めとする学生のキャリア形成支援に係る取組の推進に当たっての基本的考え方」の定義では、不十分である。福祉インターンシップを一連のプロセスとして捉え、インターンシップの枠組みを福祉インターンシップとして再定義して捉えていく必要がある。

第5章 社会福祉施設が社会福祉学専攻以外の学生を福祉インターンシップで受け入れるプロセス

2022年度インターンシップモデル事業受け入れ協力事業者のうち、7事業者を対象とする調査を踏まえ、社会福祉施設が、社会福祉学専攻以外の学生を福祉インターンシップで受け入れるプロセスを確認した。その結果の考察から、社会福祉施設が、社会福祉学専攻以外の学生を福祉インターンシップで受け入れる意義について明らかにした。

目的：社会福祉施設が、社会福祉学専攻以外の学生を福祉インターンシップで受け入れるプロセスを確認し、福祉インターンシップの意義を明らかにすることである。

結果と考察：2022年度インターンシップモデル事業者受け入れ協力事業者のうち、7事業者を対象に調査を行い、M-GTAの分析結果から、15個の社会福祉施設が社会福祉学専攻以外の学生を福祉インターンシップで受け入れるプロセス概念を生成し、概念間の関係性から6つのカテゴリーが収斂された。それらから、法人が有する資源・機能を活用した取り組みとして、福祉インターンシップを行うことで地域貢献をすすめる、社会福祉施設が地域を支える拠点であることを示し、地域からの信頼を高める取り組みに、福祉インターンシップが寄与していることを明らかにした。

本調査から、福祉インターンシップの実施理由を明確に示すことができた

ことは、マンパワーの不足が強調されている社会福祉施設において、福祉インターンシップを実施することへの意義を明確に示すことにつながる一助になる。

本調査の限界として、限られた社会福祉施設を対象に行なった調査であり、一側面からの調査となっている課題が挙げられる。今後の研究課題として、対象を社会福祉施設の種別の違いを考慮した分析を行うことや属性を増やすことなどさらなる調査研究が求められる。

第6章 福祉インターンシップ参加促進への提言

提言、研究の限界について述べた。福祉インターンシップ参加促進の効果を高めるために、①福祉インターンシップ・プログラム開発の必要性、②福祉インターンシップの評価方法の検討、③多様な学習背景からの参加促進、④長期的なフォローアップの重要性が考えられる。本研究の主な限界として、一大学のみを調査対象としたことが挙げられる。横断的な取り組みが行われている大学、複数の大学を調査対象とすることが課題である。今後の展望として、本研究の成果を土台にし、上記の検討を行うことで、さらなる福祉インターンシップの可能性や福祉人材確保のための取り組みについて整理していきたい。

<博士論文審査結果の要旨>

論文提出者：中 川 久 恵

論文題目：社会福祉学専攻以外の学生を対象とする福祉インターンシッ
プの現状と参加促進の課題

学位申請の種類：甲（課程博士，社会学）

本論文のテーマは論文題目に明示されているように、社会福祉学専攻以外の学生を対象とする福祉インターンシップの現状と参加促進の課題であり、本研究の目的は、福祉の魅力を高め、多様な人材を確保・育成するために、社会福祉学専攻以外の学生を対象に調査し、福祉に関するネガティブなイメージや福祉業界を就職先として選ばない理由を探り、福祉人材の確保につながる示唆を得ることが目的です。

まずインターンシップは、福祉業界に関する魅力を含め、職場の実情を体験できるものであるが、福祉インターンシップの現状や課題については十分に検討されておらず、社会福祉学専攻以外の学生を対象にした福祉インターンシップの現状や課題を明らかにした研究は行われていない。また、福祉インターンシップ・プログラムの課題を検討せずに、インターンシップ事業が行われていることを先行研究や過去の資料等から指摘しています。

そして、本研究では、福祉インターンシップに求められる以下の研究課題4点、第1は、福祉インターンシップ・プログラムの課題を明らかにする。第2は、社会福祉学専攻以外の学生の福祉インターンシップの参加意向と福祉インターンシップの興味・関心はどのような関係であるかを示し、社会福祉学専攻以外の学生の福祉インターンシップの参加への示唆を検討する。第3は、社会福祉学専攻以外の学生の福祉インターンシップの興味・関心と福祉インターンシップのイメージの因子から、社会福祉学専攻以外の学生の福祉インターンシップのイメージを可視化する。第4は、社会福祉施設が、社

会福祉学専攻以外の学生を福祉インターンシップで受け入れるプロセスを確認し、福祉インターンシップの意義を明らかにする。これらの研究課題4点から、研究を進めています。「研究の背景・目的と構成」を述べた第1章と「福祉インターンシップを通じた福祉人材確保に関する先行研究の検討」について述べた第2章以外の第3章から第6章の概要は以下の通りです。

第3章「大阪福祉人材支援センターにおけるインターンシップモデル事業に関する事例」では、大阪福祉人材支援センターが実施した、2年間のインターンシップモデル事業を基に、福祉インターンシップ・プログラム構築の課題及び学生の福祉インターンシップへの参加意向と興味・関心について着目して調査を行い、福祉インターンシップ・プログラム構築の課題5点を明らかにしています。ソーシャルデザインの視点で実施し、それを可能にする福祉インターンシップ・プログラム構築を行うことが望まれることを確認しています。また、社会福祉学専攻以外の学生の福祉インターンシップの参加意向と福祉インターンシップの興味・関心の関係を明らかにし、福祉の仕事は、多様な働き方があり、他業界とのコラボレーションも可能であることが、学生へ伝わっていないことから、学生がソーシャルデザインの視点で福祉を捉えることができるような架橋が必要であることを確認しています。

第4章は、第3章の調査結果により、社会福祉学専攻以外の学生が福祉インターンシップにおいて、どのようなイメージをもっているか、現状を確認する必要があると考えられたことから、社会福祉学専攻以外の学生の福祉インターンシップの興味・関心と福祉インターンシップのイメージの関係について確認することを目的に調査を行なっています。

因子分析の結果、学生が福祉インターンシップを経験することで身につけることができる能力について、期待感をもっていることが明らかとなっています。教育的意味合いをもつ福祉インターンシップを実施することが、結果的に福祉の人材確保へつながっていくことが推察されています。

第5章「社会福祉施設が社会福祉学専攻以外の学生を福祉インターンシッ

プで受け入れるプロセス」では、2022年度インターンシップモデル事業者受け入れ協力事業者のうち、7事業者を対象に調査を行い、M-GTAの分析結果から、社会福祉施設が社会福祉学専攻以外の学生を福祉インターンシップで受け入れるプロセス概念を15個生成し、概念間の関係性から6つのカテゴリーが収斂された。それらから、法人が有する資源・機能を活用した取り組みとして、福祉インターンシップを行うことで地域貢献をすすめ、社会福祉施設が地域を支える拠点であることを示し、地域からの信頼を高める取り組みに、福祉インターンシップが寄与していることを明らかにしています。

第6章「福祉インターンシップ参加促進への提言」として、福祉インターンシップ参加促進の効果を高めるために、①福祉インターンシップ・プログラム開発の必要性、②福祉インターンシップの評価方法の検討、③多様な学習背景からの参加促進、④長期的なフォローアップの重要性の4点を挙げています。

本研究に対して審査委員から、第1に、文章表現において同じことが繰り返されている等の不備が目についたこと。第2に、用語の定義の不備、第3に、先行研究と第3章の調査のつながりが分かりにくいこと。第4に、全体的に教育的視点が加わると良いのではないかと、第4章の考察の中で、教育的視点のわかりにくさと第3章とのつながりから考察を導き出すことの指摘を頂いた。第5に、研究の限界についての指摘を頂いた。評価できる点としては、研究テーマがタイムリーな話題である点、また、学生だけでなく福祉施設に対しても調査を行っている点から、福祉インターンシップの概念を多角的に捉えた研究であることが挙げられる。

中川氏の博士論文は、以上のようにいくつかの問題点を含んではいますが、現時点で改訂可能な第1、第2、第3、第4の問題となる箇所はすべて改稿した上で、本論文が博士学位請求論文に値することを認定したことを、ここにご報告申し上げます。

審査委員（主査）	川 井 太加子
審査委員（副査）	小 野 達 也
審査委員（副査）	栄 セツコ

桃山学院大学社会学会会則

第1条（名称） 本会は桃山学院大学社会学会（St. Andrew's University Sociology and Social Welfare Association）と称する。

第2条（目的） 本学会は、社会学、社会福祉学を中心として社会科学関連分野に関する研究をおこない、あわせて会員相互の学術研究を促進することを目的とする。

第3条（事務所） 本学会の事務所は桃山学院大学内におく。

第4条（事業） 本学会は第2条の目的を達成するために次の事業をおこなう。

- (1) 研究会の開催
- (2) 機関誌の編集・刊行
- (3) 講演会その他集会の開催
- (4) その他本学会の目的を達成するために必要な事業

第5条（会員） 本学会の会員は、桃山学院大学の専任教員で、本学会の目的に賛同する者を正会員とする。

- 2 本学会の会員であって定年退職した者およびこれに準ずる者は、本学会の名誉会員となることができる。
- 3 本学大学院社会学研究科の修了生および在學生で、本学会の目的に賛同する者は、本学会の準会員になることができる。
- 4 正会員は、本学会の総会および第4条に定める各種事業に参画し、本学会の刊行物の配布をうける。
- 5 名誉会員および準会員は本学会の開催する研究会および講演会に参加し、また本学会の機関誌などの刊行物の配布をうけることができる。
- 6 正・準会員は年額2,000円の会費を納入する。
- 7 本学会への入会あるいは本学会からの退会を希望する者は、その旨を会長に届け出なければならない。

第6条（機関誌） 本学会の機関誌の名称は『社会学論集』（St. Andrew's University Sociological Review）とする。

2 機関誌の編集は本学会の責任においておこない、桃山学院大学総合研究所がこれを刊行するものとする。

3 機関誌の投稿規定は別に定める。

第7条（役員） 本学会に次の役員を置く。

(1) 会長 1名

(2) 理事 4名（編集担当2名，研究会担当1名，庶務・会計担当1名）

(3) 監事 1名

2 役員はすべて総会において正会員の互選によってこれを選出し，その任期は1年とする。ただし再任を妨げない。

3 会長は本学会を代表し，会務を統括する。

4 理事は会長を補佐して会務を運営する。

5 監事は本学会の会計を監査する。

第8条（総会） 本学会は毎年度1回，総会を開催する。

2 会長は，必要があると認めるときは，臨時に総会を招集することができる。

第9条（会計および監査） 本学会の会計年度は，4月1日に始まり3月31日に終わる。

第10条（会則の改定） 本学会会則の改定は，総会の議決を経なければならない。

附則 この会則は2002年1月25日より施行する。

桃山学院大学社会学会機関誌『社会学論集』投稿規程

1. 本誌は、定期刊行物であり、原則として年2回発行する。
2. 機関誌に投稿できる者は、原則として本学会正会員および名誉会員とする。準会員は、指導教員もしくはこれに準ずる者の推薦と、編集委員会の承認があれば、投稿することができる。これらの会員以外の投稿については、編集委員会の審査を経て受理することがある。
3. 編集委員会は本学会会長および編集担当理事2名によって構成する。
4. 投稿は、「論文」、「研究ノート」、「資料」、「翻訳」、「書評」、「その他」とするが、編集委員会によってその類別を変更することがある。
5. 投稿の分量は、「論文」で28,000字（欧文の場合は14,000語）、それ以外は14,000字（欧文7,000語）を一応の限度とする。この限度を超えるものについては、編集委員会の判断により分載となることがある。
6. 投稿には英文タイトルを別記し、「論文」の場合には400語以内の英文抄録を添付する。また、「論文」、「研究ノート」には日本語および英語によるキーワードを5語以内で記すこととする。
7. 投稿は横書きとし、完全原稿を提出しなければならない。
8. 投稿者による校正は原則として再校までとし、定められた期日内に校正刷りを返却しなければならない。
9. 本誌に掲載された論文等の著作権のうち「複製権」と「公衆送信権」の行使は、桃山学院大学総合研究所に委託する。
10. 本誌に掲載された論文等については、桃山学院大学学術機関リポジトリに公開することを原則とする。

執筆者紹介

松	澤	俊	二	社会学部	近代日本の文化・ 文化(和歌・短歌)
彭		永	成	社会学部	メディア史・女性の ライフコース

社会学会役員 (2024年度)

会 長 : 小 野 達 也
理事(編集) : 大 野 哲 也
理事(編集) : 杉 原 久 仁 子
理事(研究会) : 中 西 啓 喜
理事(庶務・会計) : 木 原 弘 恵
監 事 : 宮 脇 か お り

2024年9月30日発行

桃山学院大学社会学論集

第58巻 第1号

編 集 桃 山 学 院 大 学 社 会 学 会

発 行 桃 山 学 院 大 学 総 合 研 究 所
594-1198 大阪府和泉市まなび野1番1号
TEL 0725-92-7129

印刷所 東洋紙業高速印刷株式会社
556-0029 大阪市浪速区芦原2-5-56
TEL 06-6567-0511 (代表)

ST. ANDREW'S UNIVERSITY

SOCIOLOGICAL REVIEW

VOL. 58 NO. 1 2024

Article:

- The Significance of Connections that Support
“yomu” (Composing&Reading): Reconsidering the
“Group of Tanka Poet” in Modern Tanka
.....MATSUZAWA Shunji (1)

Book Reviews:

- Exploring Media Studies' Notions of 'Second-Rateness' through
an Anti-Elite Perspective in <Media Figures>:
*A Review of Maeda Kyukichi, the Osaka Man Behind
Sankei Shimbun and Tokyo Tower*
.....PENG Yongcheng (25)

- Summary of the Doctoral Thesis by NAKAGAWA Hisae
with the Examiner's Comments
..... (41)

Published by the Research Institute,

St. Andrew's University

1-1 Manabino, Izumi,

Osaka 594-1198, Japan
